

梨の木平遺跡

1977

群馬県教育委員会



52
798

序

上越新幹線が本県を通過することにより、仮称上毛高原駅が利根郡月夜野町の利根川右岸に計画されました。これに伴い、駅をめぐる道路交通網の整備が必須となり、県土木部で県道小日向上津沼田線の特殊改良工事が実施されることになりました。

この地域は、かねてから埋蔵文化財包蔵地であったことから、工事に先立つ事前の発掘調査を当局と協議して参りましたが、昭和51年度になり、用地買収が完了したので、県教育委員会直営による梨の木平遺跡の発掘調査に着手することになりました。

その結果、予想以上の成果をあげることができました。わけても縄文時代中期の敷石住居址の完全な発見は、県下での新資料を追加したことになりました。その後、敷石住居址の保存につき県当局、沼田土木事務所と協議を重ねて参りましたところ、全面的な御理解、御協力を得て、設計変更までしていただき、現地での保存が決まりましたことは、文化財保護上画期的なことでありました。県教育委員会としましても、地元月夜野町教育委員会からの申請により、県文化財保護審議会の答申を得て、このほど県史跡に指定することに決定しました。この間、御協力、御指導いただいた関係各位に深甚な敬意を表する次第であります。

この報告書は、梨の木平遺跡発掘調査結果の概要をとりまとめたものでありまして、御活用を切にお願いして序文といたします。

昭和52年3月31日

群馬県教育委員会

教育長 山川 武 正



遺跡の調査風景

内容目次

発掘調査と遺跡の概要……………	2
調査の内容……………	6
縄文時代の遺構と遺物……………	6
弥生時代の遺構と遺物……………	15
平安時代の遺構と遺物……………	18
成果と問題点……………	24



利根川対岸（東側）から見た梨の木平遺跡

例 言

- ① 本書は群馬県道路建設課の県道小日向上津沼田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告である。
- ② 発掘調査は昭和51年5月24日から9月25日まで、遺物整理は9月26日から昭和52年3月23日まで行なった。
- ③ 発掘調査は能登健・下城正が担当し、報告は両名が共同討議の上執筆した。
- ④ 発掘写真は能登健が、他の遺物写真は渋沢実が担当し、遺物整理においては中東彰子・福田恭子・酒井田津子・堤秋子・生方妙子・辻口敏子・塚田順子・鈴木幹子が専従した。
- ⑤ 遺物実測は中東彰子が中心となり、トレースは福田恭子・辻口敏子が中心に行なった。なお遺物の保存科学処理は浜野和宗作が行なった。
- ⑥ 発掘および遺物整理において次の諸氏から御指導御助言をいただいた。記して感謝いたします。（五十音順）相沢忠洋・赤山容造・大江正行・尾崎喜左雄・小林達雄・重住豊・永峰光一・平出一治・森尚登・三輪嘉六

発掘参加者

- | | |
|---|--|
| <p>地元参加</p> <p>日本大学
(考古学研究会)</p> <p>明治大学</p> <p>地 元
協 力 者</p> | <p>永井武夫・稲田政一・石川佐兵衛・鈴木きみ江
大島一夫・笛田富次・小林まさ・鈴木信子・鈴木満枝・石田あや子・山本はな子・杉木ふき子・小林れん・長谷川やま・田中ヨシ・五十嵐美代子・芳沢せつ・原ふみ・大島ふじ・丸山そう・橋本かね・常山たみ・小川きん・樋口米子・長谷川紀子・石田きみ子・倉沢よう子・飯田みさ子・小林てい・平田よし子・深津光江・芳沢たま江・小野塚菊代・樋口つる</p> <p>原雅信・仙波享・古屋雄貴・藤巻幸男・寺内敏郎・小林和男・河合仁志・山本敏之・天羽大器・小野雄二・中丸弘子・山田栄子・中村圭子・志賀緒佐江</p> <p>松浦賢一・秋山利光・郡山正代・石井秀明・関塚英一・菊地信友・古郡正志・伏島一義・上山弥一・小野瀬美恵子・遠井富子
小林雅男・小林なみ</p> |
|---|--|

発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯 四全総の骨子となる交通網の再編成はわが群馬県にも波及しており、これに伴う県新総合計画も関越自動車道・上越新幹線計画などに即している。月夜野町はこれら両者の通過地点となり、いまや町全体が変貌しようとしている。昭和46年10月には上越新幹線新潟線の建設計画が発表され、利根川右岸の高台に上毛高原駅（仮称）が設けられることになり、駅前広場の計画や周辺の道路網整備がにわかに活発化しはじめた。とくに駅前から利根川を隔てた水上有料道路とを結ぶ県道小日向上津沼田線の改修工事計画はそのメインとなった。

またこれとともに、昭和49年には県教育委員会により周辺地域の埋蔵文化財調査が実施され、当該区域が遺物包蔵地として確認されたため、県土木部と設計変更を前提とした協議が繰返えされた。その結果、道路は遺跡の大半を避けて台地縁辺部を通過することになったが、この部分も遺跡周縁地域として発掘調査の必要性が認められるに至り昭和50年度には発掘計画が立案された。しかし、用地買収が遅延していたため実施に入れず、51年度に入ってようやく大半の用地買収が完了したことに伴い本調査に着手することになり、昭和51年5月13日付で群馬県知事と群馬県教

育委員会教育長との間で発掘調査に関する協定書が締結された。

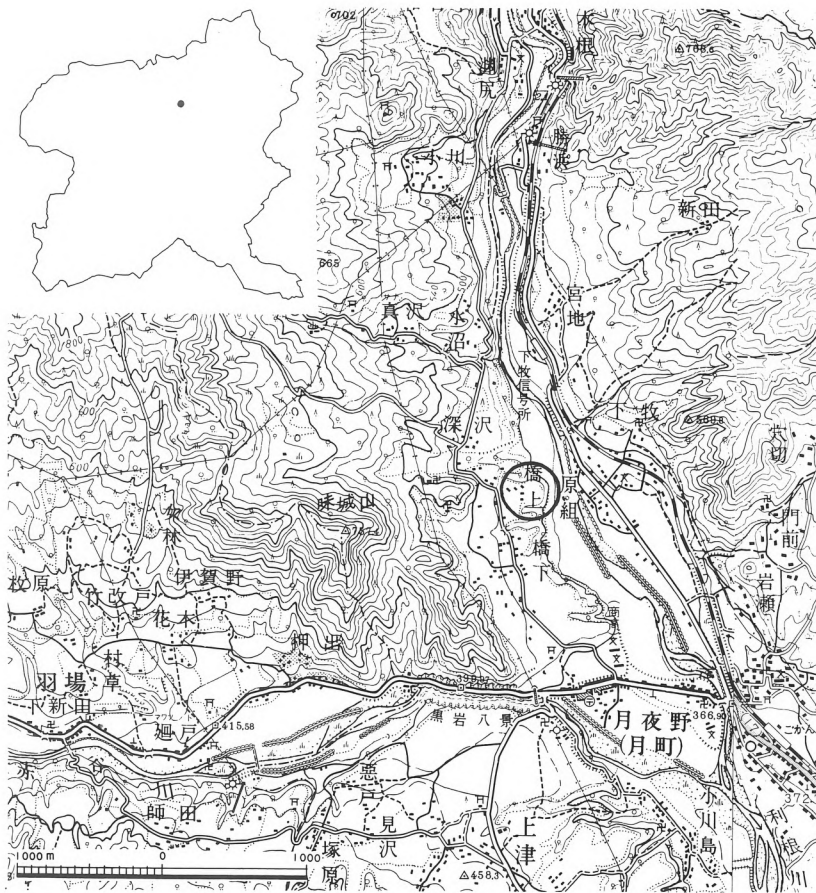
2. 遺跡の位置と地形 遺跡は上越線後閑駅の北西約2km、同上牧駅の南西約5kmの地点に位置し、利根郡月夜野町大字月夜野字藪田に所在する。なお藪田内にはすでに同名の遺跡が存在しており、これとの混同を避けて、地元民によって通称されている梨の木平の名称を遺跡名とした。

群馬県北部山間部に源を発する利根川は、同地域をほぼ南流し前橋付近で流路を東へと変える。この利根川上流域は、赤谷・片品・吾妻などの諸支川とともに良好な河岸段丘を形成しており、各時代における多くの遺跡が点在している。梨の木平遺跡は、赤谷川との合流点より約1km上流の右岸段丘上に立地している。この付近の利根川は、兩岸に三峰・大峰の山塊が屹立し、その末端に河岸段丘が形成されているが、とくに右岸は平坦地が狭少である。段丘は見かけ上三面が観察され、上位面は山側からの土石流（クサレ礫）が被っており多くの遺跡はその上に立地している。中位面は国道291号線を挟んで集落が営まれており遺跡の存否は不明な点が多い。梨の木平遺跡は最下位面に立地するが、この部分ではさらに小規模な崖線が走り上段・下段

に分割されている。またこの地点は両側山麓から流下する小河川によって、勾配の急な開析谷が両端に達し、東西約150m南北約200mの舌状台地状に分断されている。標高は上段で約430m、下段で422mで、利根川との比高は約30mである。

3. 周辺の遺跡 梨の木平遺跡周辺の調査は上越新幹線計画に伴う調査によって、その端緒が開かれたと言ってもよい。また、これより先昭和16年と同45年に深沢・洞の窯址の調査がおこなわれ、県内における重要な生産址の雄として注目されていた。また利根川上流域では月夜野町道木原で縄文前期の住居址が、水上町大穴では中期の敷石住居址が発見されており、赤谷川流域では新治村新巻遺跡・布施（役場）遺跡などで縄文中・晩期の調査がおこなわれている。

月夜野町地内では上越新幹線の建設に伴って昭和48年以来9カ所の遺跡が調査され、そのうち約半数は現在も調査が進行されている。縄文時代の遺跡は梨の木平遺跡をはじめとして前中原遺跡、深沢遺跡、洞3遺跡、都遺跡、十二原遺跡などがあげられる。前中原遺跡では早期茅山期の炉穴4基とともに条痕文系土器の



5万分の1地形図：梨の木平遺跡の位置

出土があり、前期前葉の住居址4軒と土壌群も調査された。県内における炉穴の発見はこれが最初のものである。茅山式土器は都遺跡でもいわゆる陥穴2カ所に伴って若干出土しており、付近でも二・三の表採できる地点がある。また十二原遺跡は昭和48年に県教委によって調査され、縄文時代では中期阿玉台式土器の良好な資料が抽出されている。調査区域は巾12mの新幹線路線敷内のみで遺跡の全容を把握することはできなかったが、同Ib式からII式へ移行する段階の土器片が多く出土しているが遺構は確認されていない。また洞3遺跡は中期、深沢遺跡は中・後期の遺物がすでに採集されており、来年度から本格的な調査に入る予定である。

弥生時代の遺跡は県内でも量的には少なく、特に住居址の検出は重要な課題となっている現在、月夜野地区では十二原遺跡、大原遺跡では後期樽式土器を伴う住居址3軒が確認されている。群馬県山間部には多くの地域で樽式土器の分布を見ている。月夜野地区でも数ヶ所の分布を見るがいまだ内容を知り得るだけの資料に恵まれていない。その点大原遺跡の2軒の住居址は良好な資料となり得るが詳細を述べた報告が出ていない。なお中期の資料は梨の木平遺跡の資料のみである。

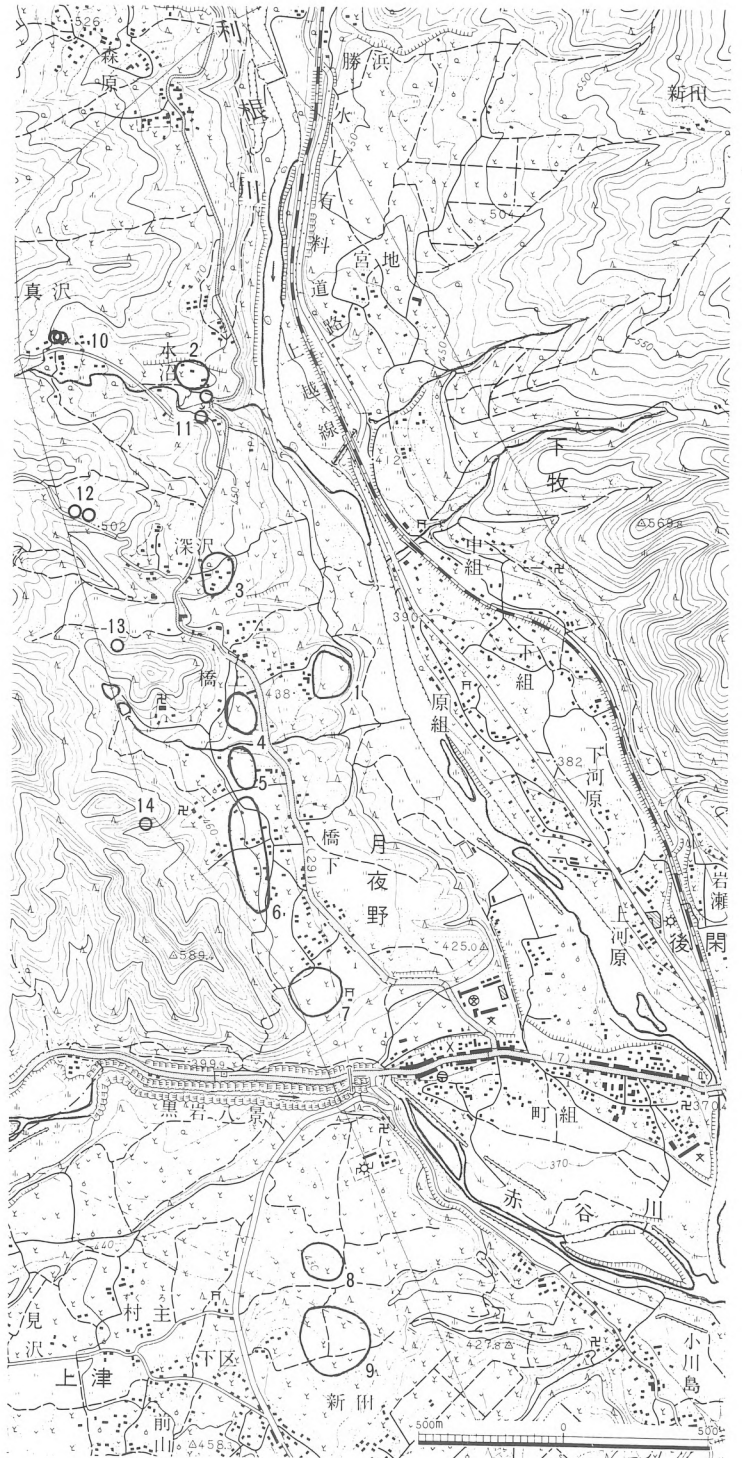
古墳時代の遺構は梨の木平遺跡周辺では現在まで未確認である。しかし十二原遺跡では和泉式土器を伴う住居址が1軒調査されている。また平安時代を中心とする歴史時代の遺跡は比較的多く確認されている。大峰山塊西麓の地形変更線付近では各谷すじに沿って多くの窯址の存在が推定され、現在まで真沢・水沼・深沢・深沢2・洞の5地点でそれぞれ群をなすと思われる窯址が調査確認されている。これらの窯址群は9C代のものとされており、昭和45年には洞窯址群中の3基が調査され、9C初頭の瓦の焼成を伴った須恵器窯であることが判明した。なお、これらの窯址群に関連した窯業集団の調査も最近おこなわれるようになった。洞2・3遺跡では江戸時代の小鍛冶・井戸・墓などとともに平安時代の住居址の調査が現在続行されており、ほかに前中原遺跡などでも同様の資料が若干出土している。藪田遺跡でも同時期の集落が想定され、昭和52年度から本格的な発掘調査が計画されている。梨の木平遺跡でも同様の資料の出土を見たが、年代の相違も若干あり窯址群と窯業集団の関係を把握するまでには至っていない。

調査報告

- 山崎義雄「上野国利根郡月夜野町二窯址について」
古代文化12-4 昭和16年4月
- 井上唯雄「群馬県利根郡月夜野町洞窯跡発掘調査報告」
月夜野町教育委員会 昭和48年3月

○群馬県教育委員会「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報I」 昭和50年3月 同教育委員会

○群馬県教育委員会「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報II」 昭和51年3月 同教育委員会



- 1. 梨の木平遺跡 2. 前中原遺跡 3. 深沢遺跡 4. 藪田遺跡 5. 洞3遺跡 6. 洞1・2遺跡 7. 都遺跡 8. 大原遺跡 9. 十二原遺跡 10. 真沢窯址群 11. 水沼窯址群 12. 深沢窯址群 13. 深沢窯址群第2地点 14. 洞窯址群

2万5千分の1地形図：周辺の遺跡



グリッドの配置状況



敷石住居址部分の拡張



弥生土器集中出土地点の発掘



平安時代住居址の遺物の取上げ

4. 調査の方法と経過 まず調査の前段階において全域の遺物の分布調査をおこなった。その結果ほぼ台地全面に土師器・須恵器片の散布が見られたが、耕作物との関係もあり量的に多いものではなかった。特に今回の調査範囲内においては前回の分布調査の結果と同じく遺物の散布は見られず、遺跡外縁部の感を強くした。

調査区域は遺跡の乗る台地の縁辺部を東端から北端へ曲線を描きながらまわり込むようにあり、しかも想定される遺跡範囲の外縁部にあたるため台地全域に3×3mを最少単位としたグリッドを設定した。グリッドの原点は南西隅に置き、X軸をアルファベットでY軸をアラビア数字で呼称した。なお主軸(X軸)はN-35°-Eの方向を示している。調査は各グリッドの南西隅を起点としてX方向へ2m、Y方向へ1.5mの小区画を作りテストピットとして調査を進めた。またY軸9~19間の部分は崖線部にあたり、これに直行するセクショントレンチを入れ上下段の土層関係を調査した。

遺物包含層の調査は下段より始まった。まずX軸Rを中心に直線的なテストピットを入れ包含層の把握に努めた。その結果をもとにテストピットを下段調査区域全域へと拡大していった。各グリッドともに縄文時代から歴史時代にかけての遺物が土器片を中心に若干ながら分層的に出土し、包含量こそ良好ではないが各時代の層位的関係を明確に把握することができた。なおY軸45以北で弥生中期の土器片・大型打製石斧を集中的に出土する地点を確認し、遺構(住居址)の存在を想定しつつ拡張をおこなったが検出されなかった。また同じく35以北でも同時期の土器片が比較的集中して出土し、ここでも拡張をおこなった結果第III層中で土壌群が確認された。

上段ではテストピット調査の結果ローム面までがいたって浅く、しかも大部分が耕作などによって攪乱されており遺物包含層も全く失われていた。しかしN-10グリッドにて住居址の落ち込みを確認し、新たに区域外の借地交渉の後拡張をおこなった結果、歴史時代の住居址一軒の調査がおこなわれた。またQ-5グリッド付近を頭とした埋没谷を確認し、この部分の拡張調査をおこなった結果地表下約2mのところ縄文時代中期の敷石住居址を検出した。住居はローム層と埋没谷内黒色土層にまたがって構築されており、ローム層部分では堅穴壁面を確認し得たが、黒色土層部分の土層の識別が不明瞭で掘り方を検出することはできなかった。なお拡張区末端にまで及んだが、土層調査によって最近まで土砂くずれが続いており、当時の崖線は若干延長された部分にあったであろうことが想定できている。

住居址の調査は、遺物の出土位置をドットマップとして記録を作成しながらおこなわれた。敷石住居址については出土遺物も少なく容易におこなわれたが、平安時代の堅穴住居址に関しては上半部が耕作によって攪乱破壊されており、この部分には縄文・弥生時代の遺物も混在しており住

居址上部一括として遺物の取り上げをおこなったが、量的にはさほど多くはなかった。大部分の遺物は床面に密着した状態で出土しているが、やや上位での出土もあり、これらの遺物に関しては床面より何センチメートル浮いているかを記録した。また貼り床（たたき床）下からも遺物が出土しており、これらの遺物は床面の基線をもとに床面より何センチメートル下がっているかを記録した。しかしこの場合は深さはさほど意味をもたず、床面下の掘り込みとの関連で出土位置が主な問題となろう。

なお調査期間中に地元民および一般を対象として数回の遺跡見学会を催し、遺跡保存の声が高まった。参加学生が中心となり広報活動も盛んにおこなわれ、関係部局もその方向で検討が加えられていった。

5. 遺跡の基本的層序 梨の木平遺跡の基本的な土層は上下両段丘面ともにほぼ5層に分かれる。しかしローム面までの深さが各地点で異なっている。上段では20~30cmで、大半が耕作時の攪乱層となっており状態は良くない。下段ではおおよそ1m前後でローム面まで達するが、崖線際は深くなり1.5~2mとなっている。

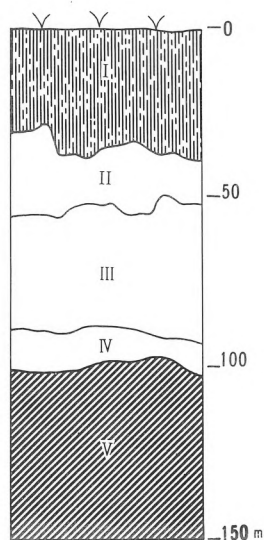
第I層（表土層） 遺跡の大半が桑園で、深耕のため表土の攪乱が著しい。上段では埋没谷以外はほとんどがローム層まで攪乱されている。全般にわたってクサレ礫の混入が多い。

第II層（黒色粘質土層） I層に多いクサレ礫を含む部分もあるが、一般的に粘性の強い土質である。またまばらに榛名山二ツ岳の軽石を含むがローリングを受けたものが多い。下段ではこの層中に土師器・須恵器片を含んでいる。

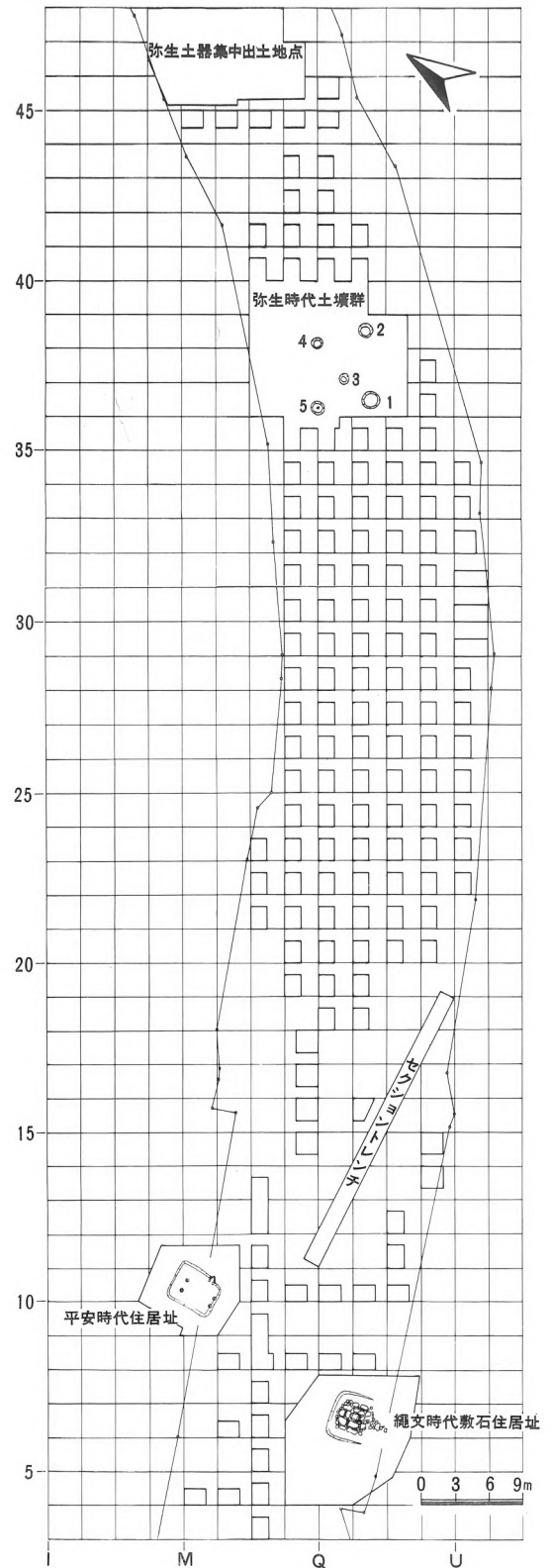
第III層（黒色粘質土層） 部分的に拗黒色を呈する場合もあり色調は一定しないが砂礫・軽石などを含まず緻密な安定した上層である。平均40~50cmの厚さでI・II層を合わせた厚さと同じになる。また下段崖線付近ではII・III層間に薄いクサレ礫の堆積を見るがIII層にまで影響を与えてはいない。上半部で弥生土器を包含し、下半部で縄文土器を包含するが分層はできない。

第IV層（漸移層） 暗い黄褐色を呈するが不安定で、部分的にはIII層から直接ロームへ移行するところもある。

第V層（ローム層） 上面が洗われているような部分もあり上面は安定していない。上段敷石住居址付近では約40cmで大形の礫層となる。（能登 健）



基本土層図



グリッド図（主要部分）

調査の内容

縄文時代の

遺構と遺物

縄文時代の遺構は中期末葉の加曾利E4式土器を伴う敷石住居址が上段南側の台地末端部で一軒確認された。またその周辺から同じく中期前・中葉の五領ケ台・阿玉台式土器の大型破片が比較的集中して出土しているが、遺構の確認までには至らなかった。ほかに前期黒浜式が各グリッドから、諸磯b式が下段中央の利根川に面した斜面から集中して出土しているが、ともに破片数も少なく遺構も確認されなかった。一般的に縄文時代の遺物は少なかった。

1. 敷石住居址 上段発掘区のQ-7グリッドを中心に確認された。表土下約1mの厚さで第II層に酷似した土層が堆積しており、これより約50cm下位で敷石面が確認された。住居確認面より約20cm上位で比較的多くの土師器片が出土しており、この時期にも傾斜があったと思われる。住居址覆土は小石や炭化物を多く含む不安定な土層であった。また住居はローム層の傾斜部分に水平に構築されており、北半はローム層を掘り込んでいるため明確に壁が確認されたが、南半はローム層がもぐり込んで上層の黒色土層中に位置しているためプランの確認はできなかった。

住居址は敷石のある主体部に南側の張出部が付加されている。主体部のプランは明確に確認されている。主軸となる南北軸は約4.1mで東西軸は4.4mの隅の丸い方形を呈している。壁高は北壁で確認面より52cmである。壁直下は各部分で敷石の周縁へと緩やかなカーブをもって続いている。住居内には5本の主柱穴と2本の支柱穴がある。主柱穴は直径15~32cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。深さは64~83cmと深い。支柱穴は南側出入口部にあり、直径15~20cmで深さはピット6が36cm、ピット7が30cmである。なお主柱穴はピット1・2間と4・5間が2.4mで、2・3、3・4間が1.5mである。6・7の支柱穴間は約1mである。

住居の主体部分における敷石は、各ピット間を直線的に結んだ範囲で配置されており、計画的な構築が見られる。大形の板石は板状節理された安山岩で厚さは2~5cmであ

る。このほか若干の河原石を利用しており、それらの配置はほぼ左右対象となっている。大形の板石は奥部に4石、右空間部では炉に接して2石と手前中央に2石が、左空間部では炉に接して1石と外縁に3石が配されており、奥部板石の両端には大形の扁平な河原石が各1石ずつ配されている。またこれらの石の間には、そのスペースに応じて中形の板石や小さな河原石が丁寧に詰められている。なお埋嚢付近は若干乱れており配石状況に不明な部分がある。主体部の敷石は東西・南北ともに約3mで、各辺は各柱穴間に則しており東西の2辺がやや長い不整六角形を呈している。敷石は柱穴の掘り方上にまで及んでおり、各柱穴とも根詰めと思われるコブシ大の石が在る。なお敷石下はソフトなローム土で整地がおこなわれており、おおよその水平を保っている。また敷石の周囲は各辺に沿って巾18~30cm、深さ7~10cmの浅いU字状の溝があり、何かの構造を思わせるが用途は不明である。さらにこの溝上には大小の河原石が若干高レベルで立位に配されている。

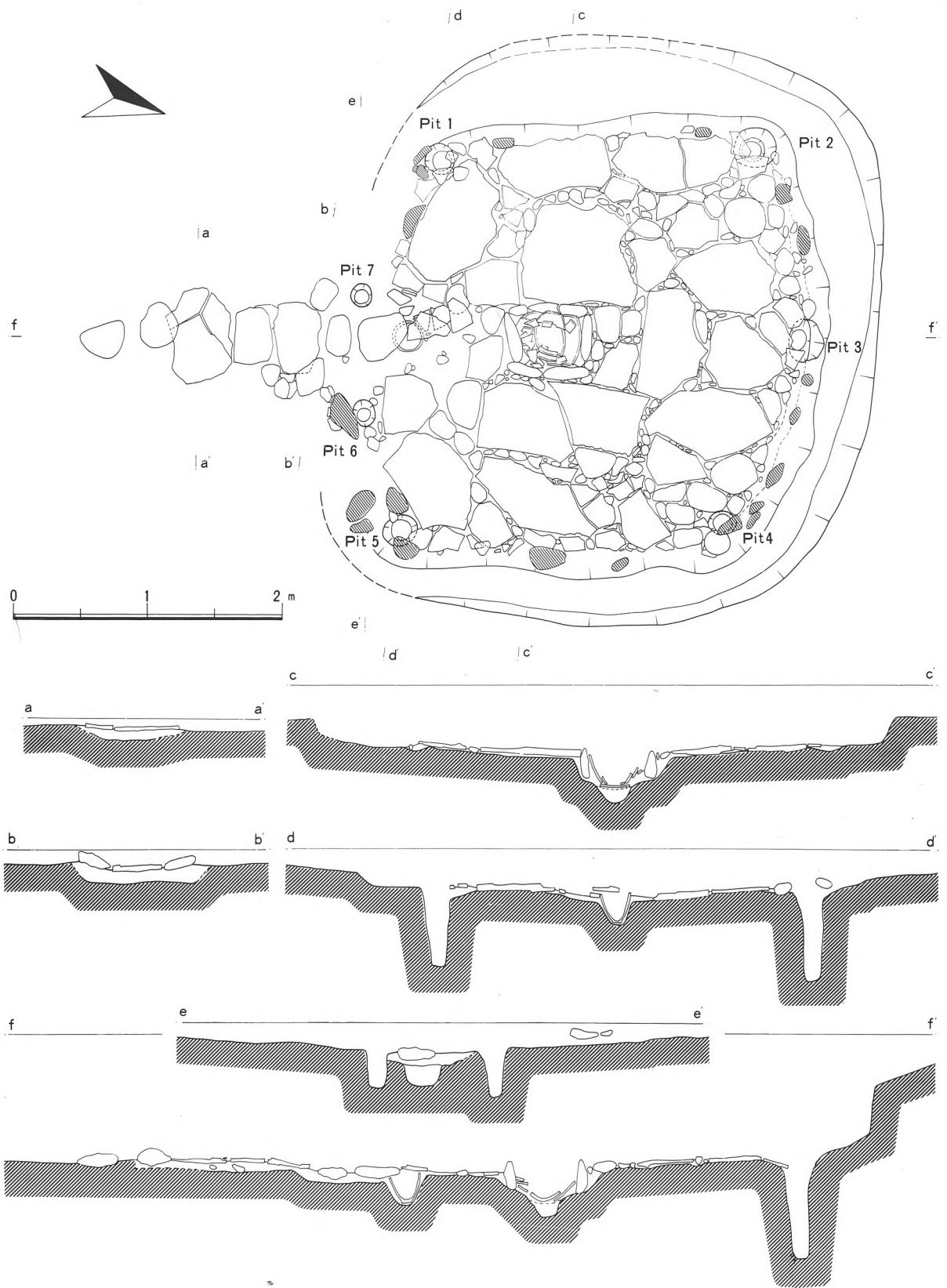
炉は大形の河原石を5石立位に配して構築されている。40×45cmの長方形で炉石上端は敷石面より約3cm高くなっている。炉床は大形土器の上半部を打ち欠いて敷きつめてあり、ほかに別個体の土器2片を利用している。炉の側石は上半部分が焼化しており、部分的にススけたところもある。また炉床の土器片を除去し、掘り方の調査をおこなったが、摺鉢状を呈しており上縁のローム層の部分が焼化しており、その埋土中にはブロック状の焼土や炭化物が多く混在していた。

埋嚢は深鉢形土器の下半部を利用しており、口径は22cm、深さは23cmである。埋嚢上には河原石と板石が迫り出すようであったが、河原石は若干ずれ込んでいるようで、板石は埋嚢外にあたる部分で中形の板石2石が下にあり、付近の状況とあわせ見ると蓋石というよりも、後時に移動した結果と見る方が良いだろう。

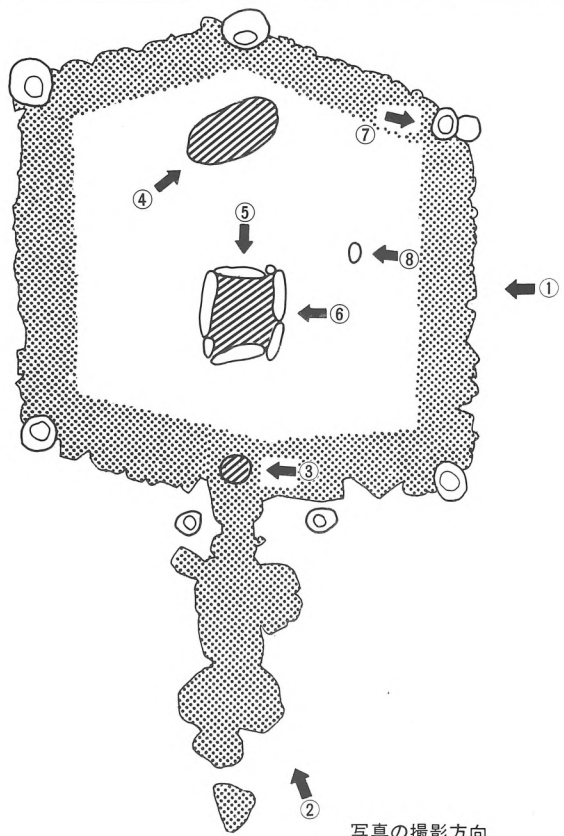
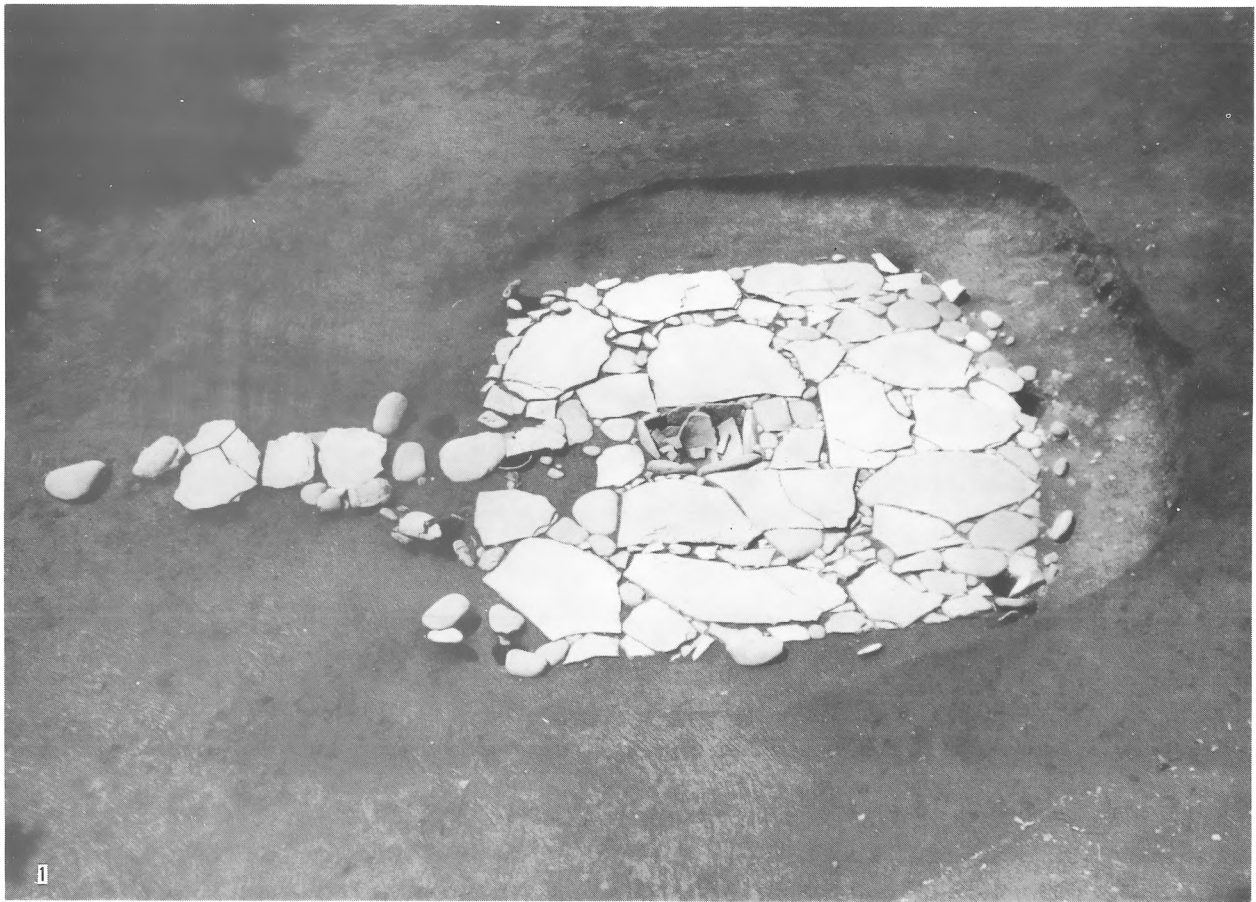
張出部は北側（主体部に接している部分）から、2石の河原石、3石の板石、さらに2石の河原石が1列に配されて造られている。張出部全長は1.81mで、巾は平均60cmとなる。3石目は若干斜めになり両端に大形の河原石が配されて一段高くなっている。この部分が住居の内外を区画する地点と思われる。なお張出部・埋嚢・炉を結ぶ線はN-17°-Wを示している。



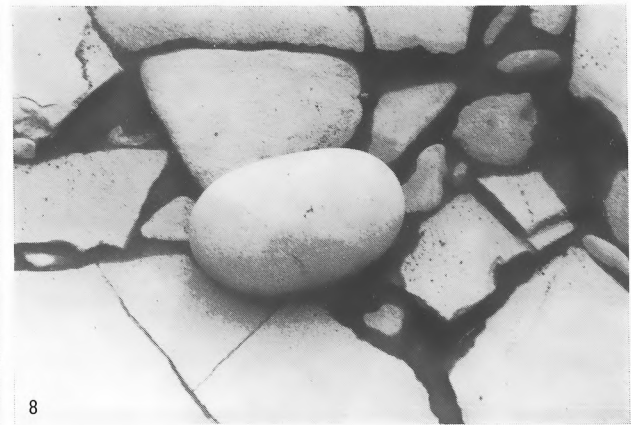
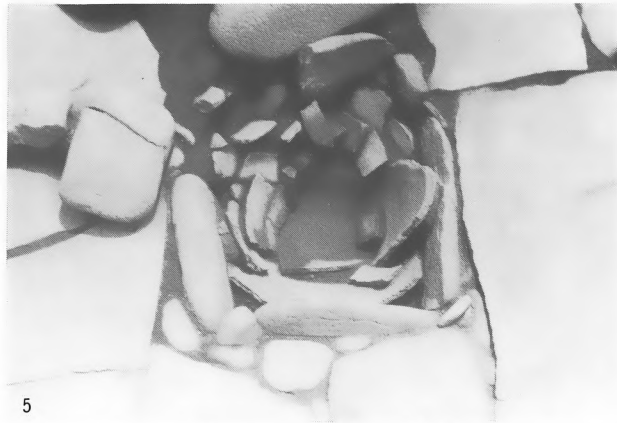
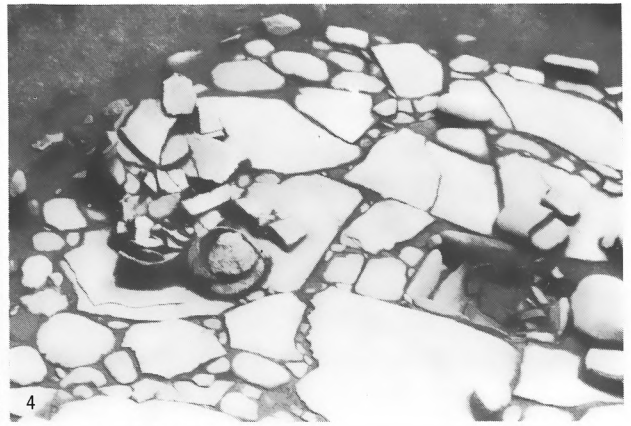
大形深鉢の取り上げのナップ



敷石住居址実測図



写真の撮影方向



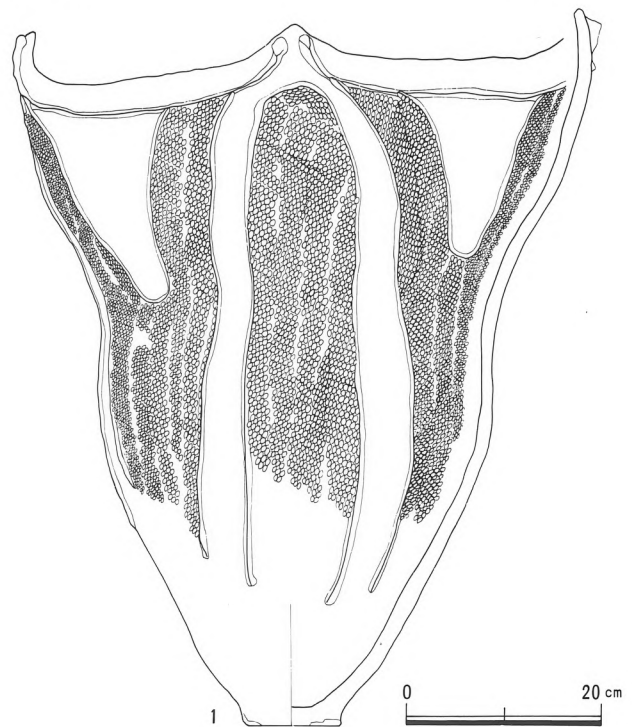
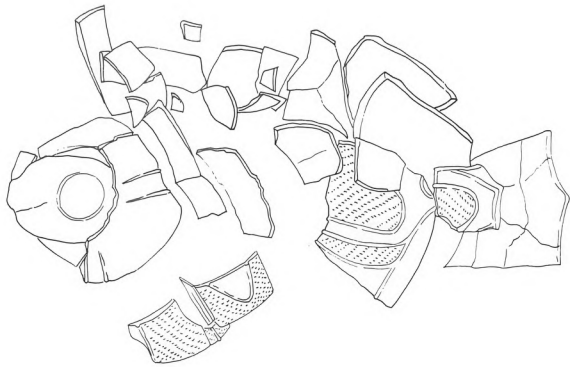
図版解説

①敷石住居址全景。住居址上に散乱していた石のうち原位置の判明したものに限って復元してある。東側地上約3mのところから撮影。各柱穴間を結ぶ直線で敷石が配されており、奥部2辺はさらに立位の石で区切りが見られる。右方に向かって壁が消えてゆく部分がローム層から黒色土層へ変化する地点である。②敷石上の遺物の出土状態と調査時の敷石の状況。張出部分方向からの地上撮影。手前の張出部と主体部をつなぐ部分に石の乱れが見られる。この部分は階段状になっているが位置不明な石が多い。③調査時の埋塞付近の状況。埋塞上に自然石と板石が覆っているが、付近の状況とあわせると後時の移動と思われる。板石の下には2枚の中形の板石がある。④主体部奥部板石上の大形深鉢の出土状態。⑤・⑥炉の状況。⑤は調査時のもので左側の2石は原位置に復元されている。炉石は上半部が焼化しており、ヒビが入っているものが多い。打ち欠かれた大形土器片で炉床を作っている。⑥は土器片の除去後のもので若干白味の部分は焼土である。⑦ピット4と石皿の出土状態。ピットは垂直に掘られており、根詰めめの石がある。石皿は根詰めめ用か否かは不明である。⑧丸石の出土状態。敷石部東側中央から出土。

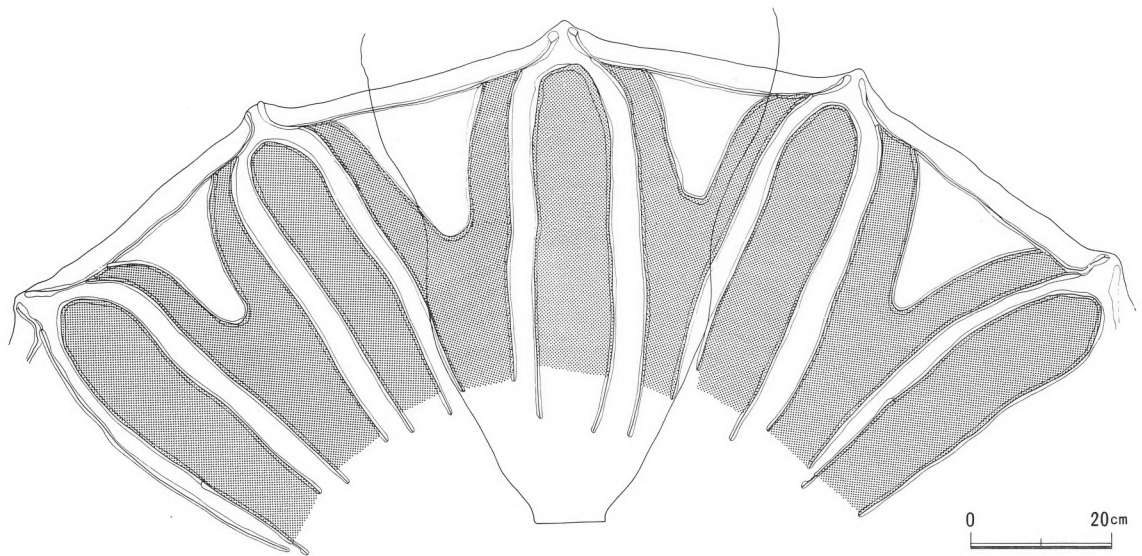
2. 出土遺物 土器は完形および破片を含めて8個体が出土している。1の大形深鉢形土器は敷石上面に一括出土しており、2は埋甕として、3および4の一部は炉床用として住居の構造に付随して出土している。ほかは住居内覆土から出土している。1は敷石上奥部の大形板石上に横位で一括出土した。口縁部から底部にかけて一線的に出土しており、さほど散乱していない。高さ73cmで口径60cm、底径10cmのいたって不安定な器形をしている。4単位の文様構成で口縁部無文帯下にいわゆる断面三角形の隆帯を配し、同じ隆帯が口縁部の各突起から2本アーチ状に垂下している。また、この隆帯内と隆帯間の三角区画内には縄文が施されていない。画線内充填の縄文はL・Rである。2は上半が欠失しているが、へら状の工具で鋭く区画された沈線によって入り組んだ懸垂文が表出され、区画外にL・Rの縄文が施されている。3は口径44cmの大形深鉢であるが上半のみである。口縁直下に隆帯が囲り、それ以下に縦位でL・Rの縄文が施されている。4は胴部みの破片で器形を推定することはできないが、かなり大形を呈するであろう。全面にL・Rの縄文が施されているが、ほかの縦位の施文法とはやや異なり部分的に乱れているところがある。6は口縁直下の隆帯が口縁部突起に集約されている。縦位の縄文はL・Rである。7は口縁がやや内反気味の大形の深鉢である。口縁を取り巻く隆帯から2本の隆帯が底近くまで下る文様を構成するものであろう。8は頸部より上半が大きく内湾

し口縁がやや波状を呈する器形で、文様構成は1と近似している。口縁部突起が橋状の把手になるのが多いが、この例は上下が舌状の突起で終わっている。また隆線の配置の違いで上半部の三角区画内の縄文の充填が逆になっている。9・10は同一個体と思われる。赤味を帯びた微密な胎土で器厚も薄い。装飾的な大型の把手の付いた胴丸の鉢形土器であろう。このほか同一個体と思われるが接合できないものが数点出土している。概して出土土器は少なく、住居上の完形土器は1個のみであった。出土土器は中期末葉の加曾利E4式を理解するための良好な資料といえよう。

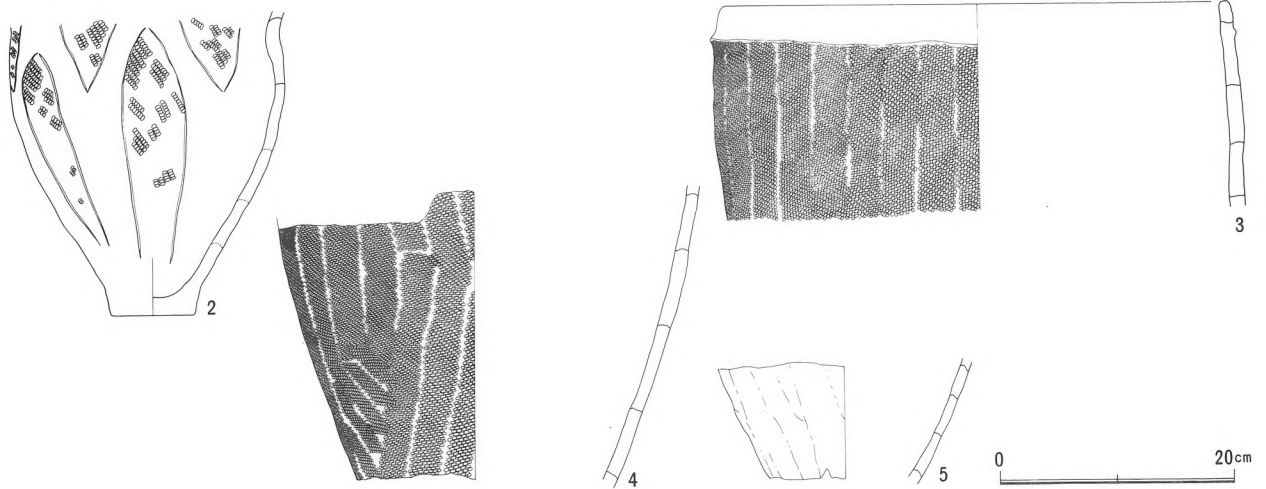
石器は土器と同様に量的にはあまり多くない。ピット4の根詰め石付近で石皿が出土しており、ほかは覆土中の特に周縁部に多く出土している。1は18×22cmの小形な石皿で砂岩製である。石皿面は凹状になり囲りとの区画が意識されているが、稜は明確に造り出してはいない。裏面は大小の凹穴が集中して55ヶ所ほどある。ほとんどが円錐状の穿孔で、いわゆる凹石(敲石)の一部に見られる集合打痕的なものではない。また凹穴の先端が細長い溝状を呈しているものもあり、錐揉みの状態で穿孔しているともいえない。2～5は打製石器である。2・3は刃部が横位に調整されており、4・5とは性格が異なる。ともに細部の調整が粗雑で不安定である。6・7は磨石で、ともに安山岩製である。6は球状を呈しており、7はやや偏平である。ともに磨石の形状を呈するが機能したか否か不明な点もある。このほか敷石面から大形の隋円形を呈した自然石が出土している。(能登 健)



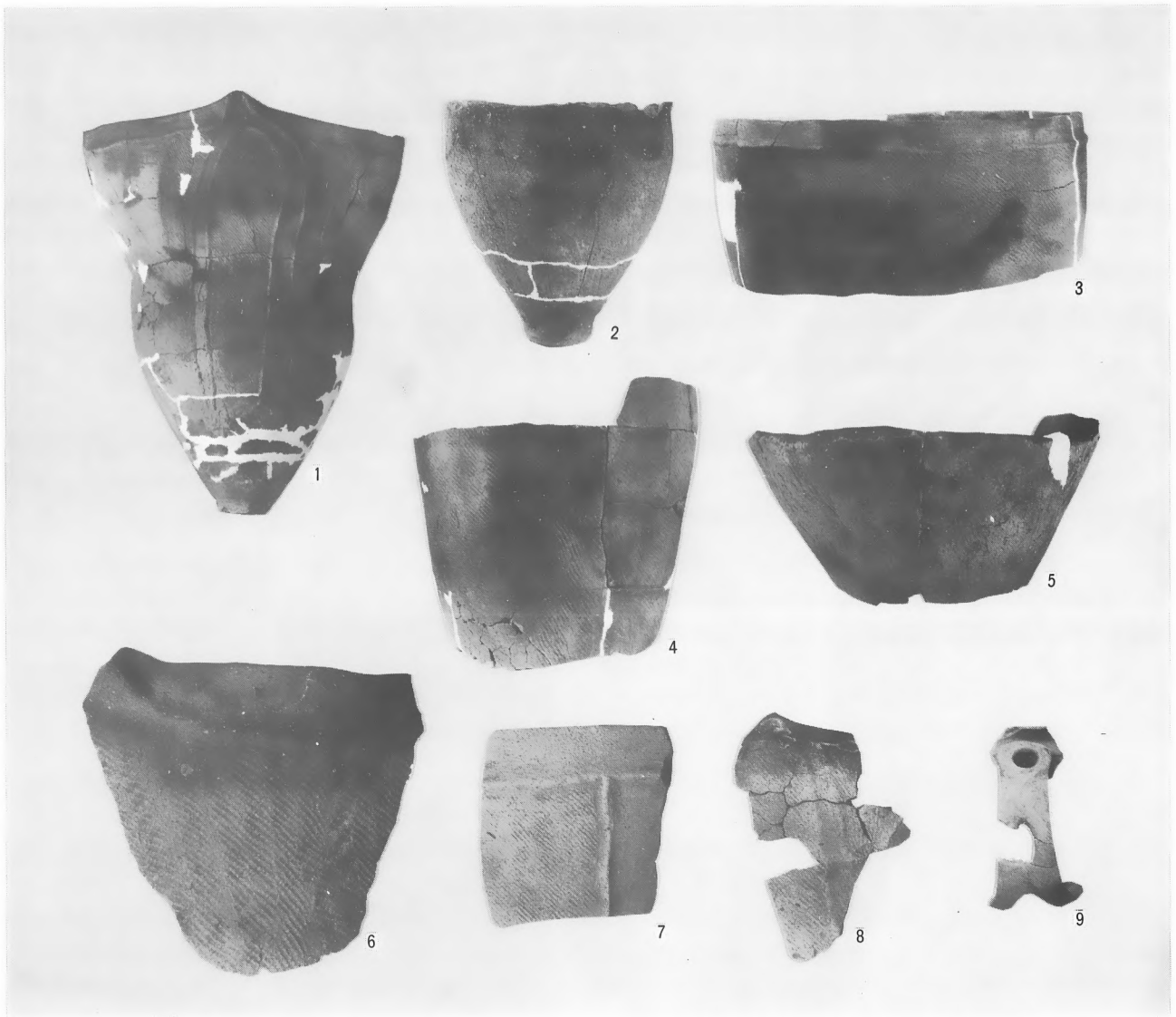
(左上)大形深鉢土器の出土状態図。(左下)同、出土写真。
(右)同、側面実測図。

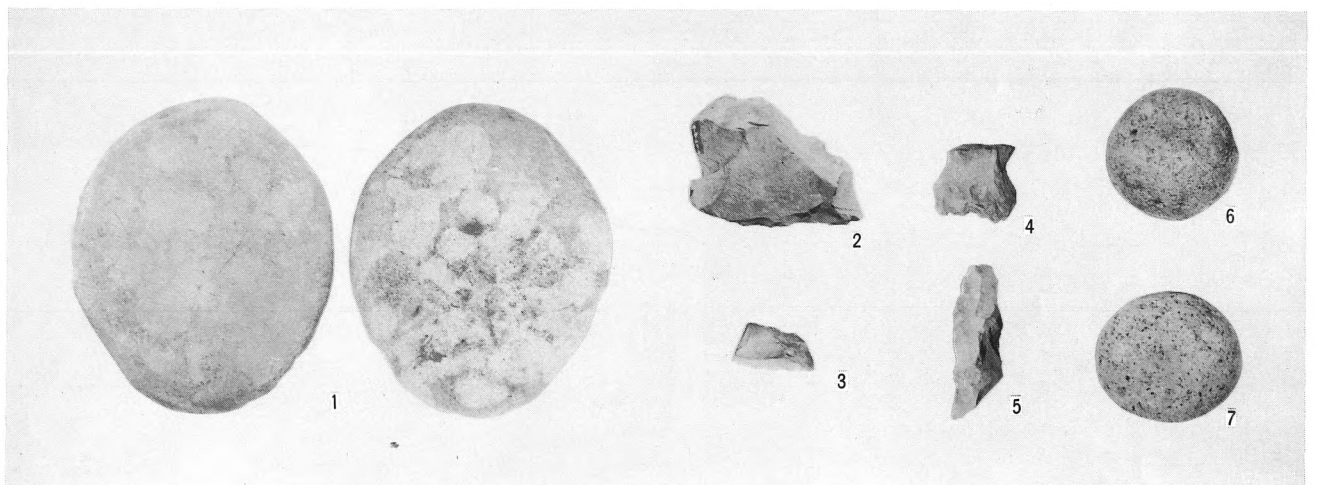
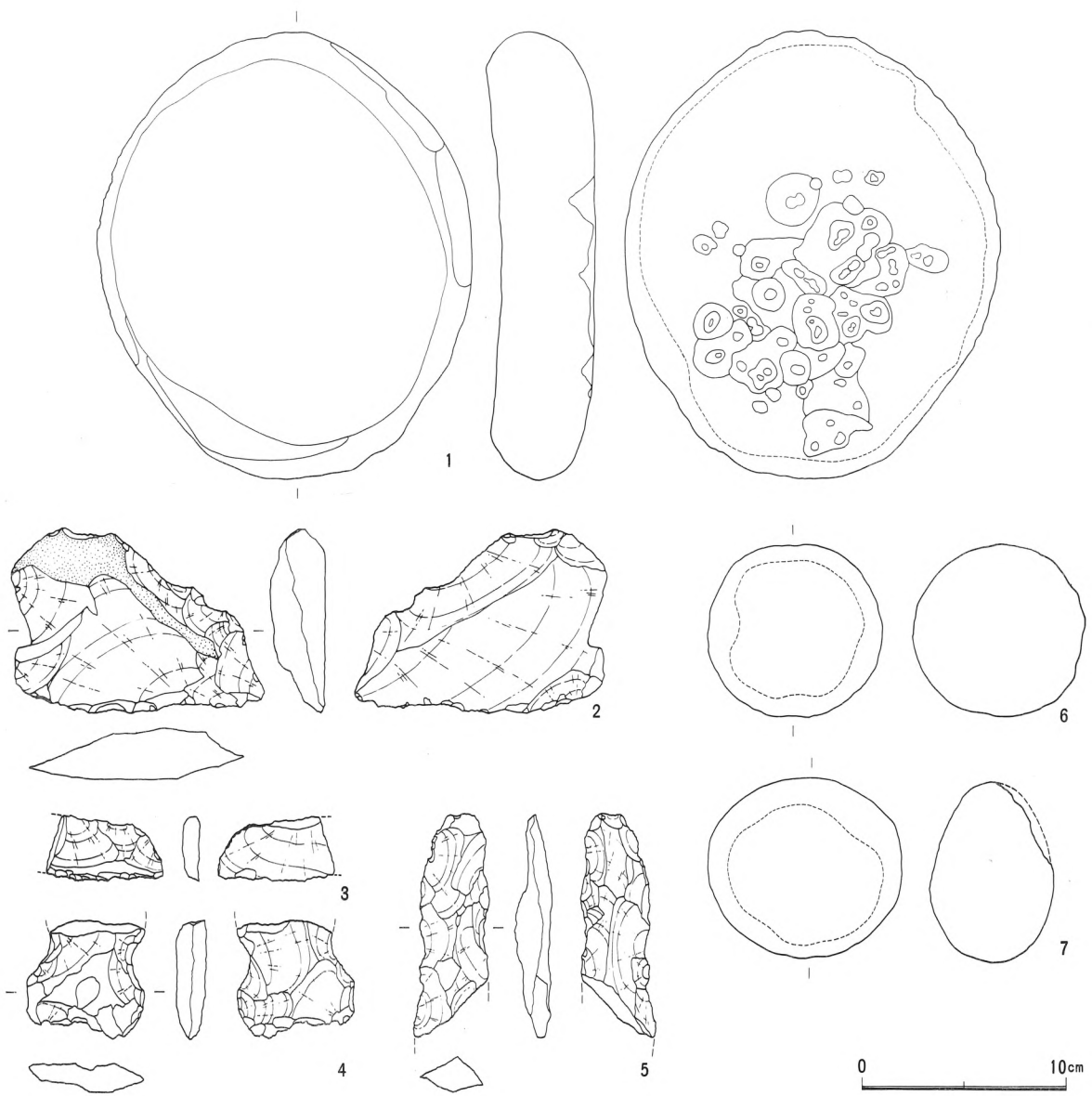


大形深鉢の展開写真と展開模式図

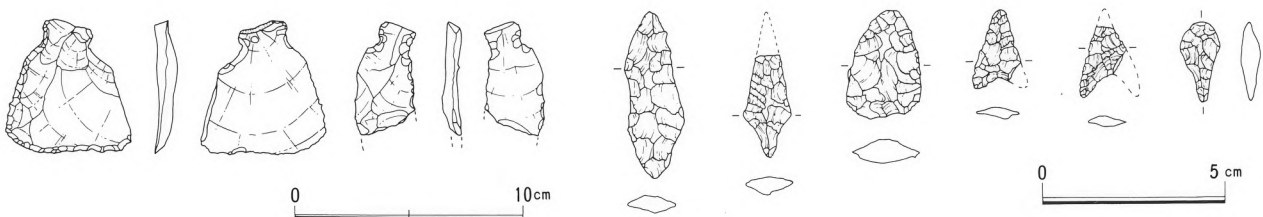
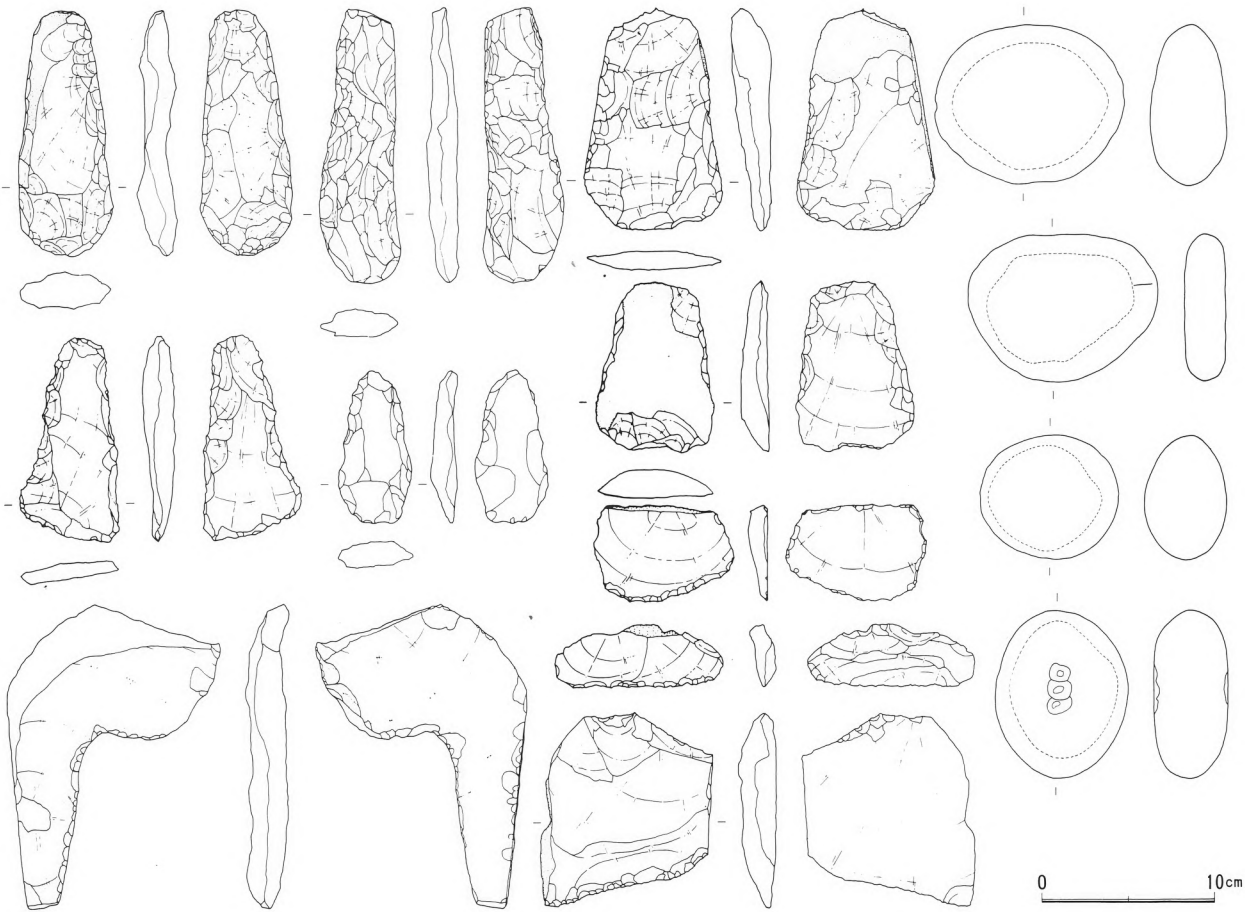
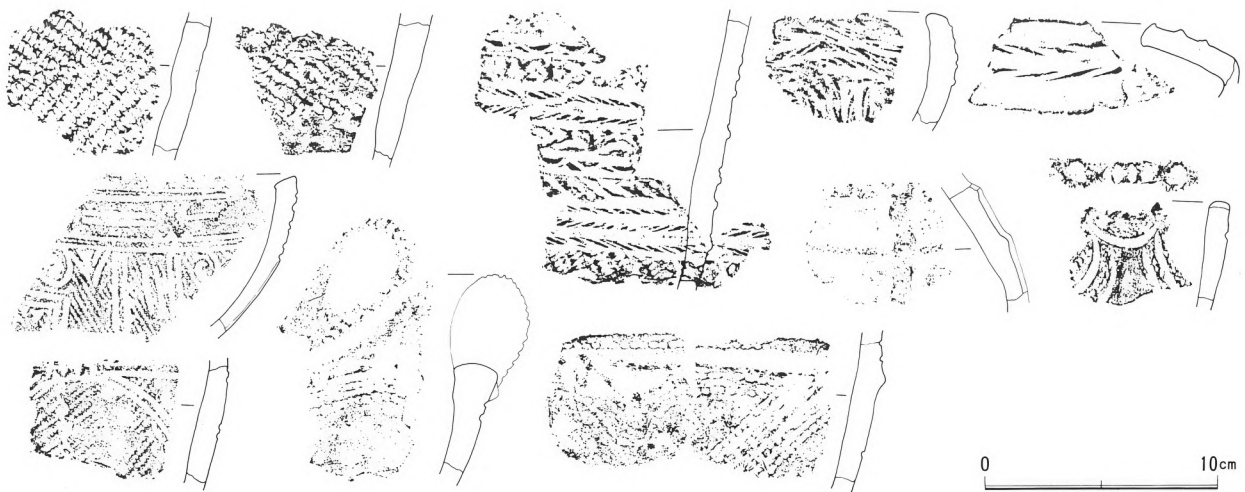


敷石住居址内出土土器実測図





敷石住居址出土の石器（実測図と写真は同番号）



グリッド出土の縄文時代遺物

弥生時代の の 遺構と遺物

下段中央部の第II層で中期土器片が集中して出土した。大型打製石器を数点伴っており、住居址の存在を予想したが、黒色土中の出土であり遺構の確認までには至らなかった。また同じく下段南側で5つの土壌を確認したが、伴出遺物が無く層位的な関連で一応弥生時代の所産として位置付けた。多くのグリッドから小破片が散発的に出土しており付近には同時期の集落の存在が予想されるが、今回の調査では内容を把握するまでには至っていない。

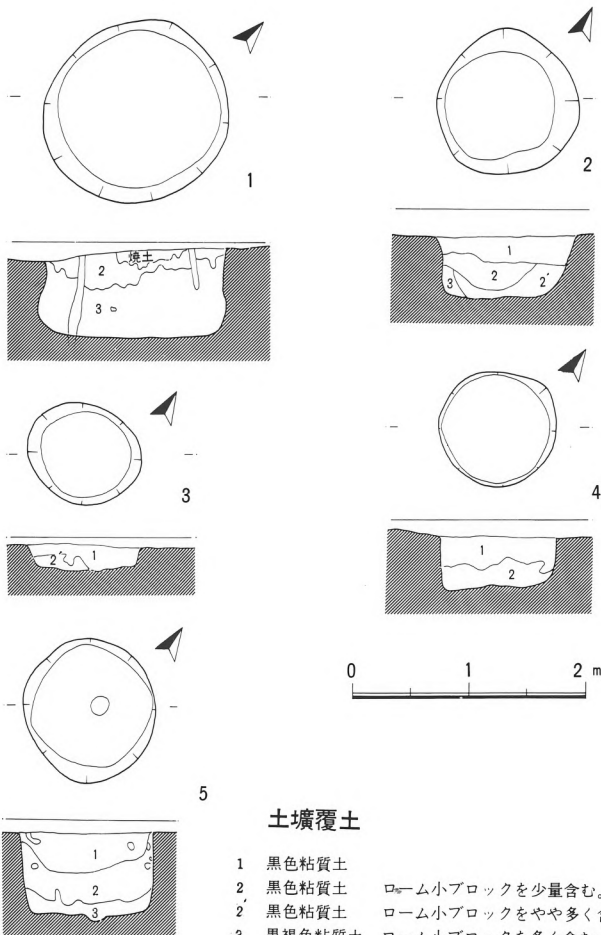
1. 土壌群 下段発掘区の東南端の平坦面に位置し、Q-37グリッドを中心に第III層上面で確認された。これら5基の土壌を中心に一定の間隔をもって位置する。またそれぞれの規模に差異があるが、プランはすべて円形で、覆土もほぼ同様の状態を示しており、黒色土であるが下部でローム小ブロックを多く含むようになる。

1号土壌は最大の規模をもち、断面形は底面近くでやや入り込んだフラスコ状を呈している。覆土上部に焼土が堆積しており、周囲に炭化物を若干含んでいる。またコブシ大の自然石が20数個出土した。2～5号土壌はほぼ垂直に掘り込まれており、底面はほぼ平坦で円筒形の断面形を呈している。ともに1号と同様の自然石が10数個ずつ出土した。土壌内からの出土遺物は少なく、1号土壌内から無文

土器片が数片出土しているが時期は判然としない。周囲のグリッドから弥生土器が比較的多く出土しており、また弥生土器・石器の集中地点にも近く、他期の遺物も少ない。確認面も弥生土器包含層と同位である。

土壌一覧表

No.	平面形	断面形	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	円形	フラスコ状	161	151	-79
2	円形	円筒状	124	121	-54
3	円形	円筒状	99	84	-24
4	円形	円筒状	104	100	-42
5	円形	円筒状	124	112	-71



土壌 実測図

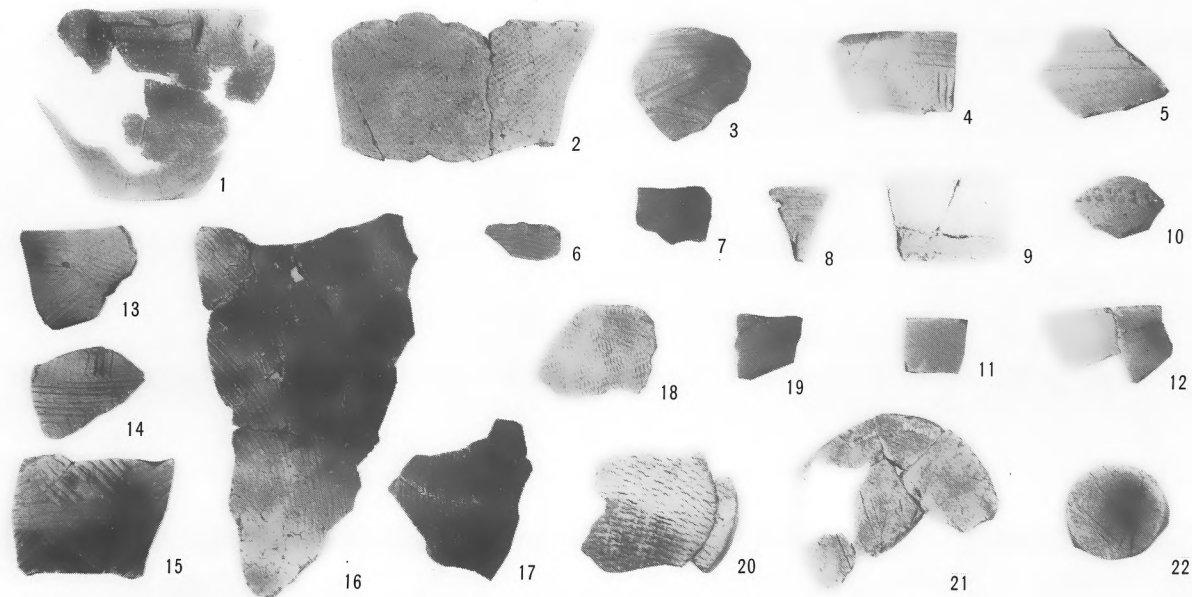
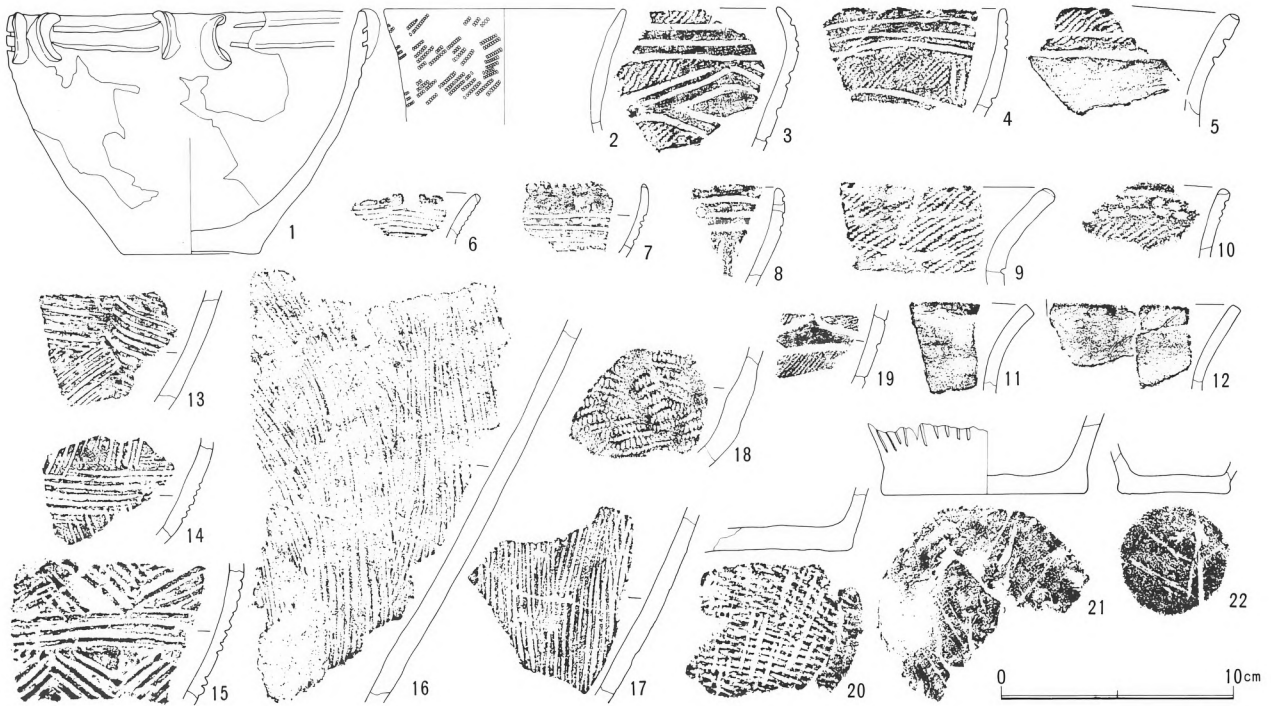


土壌の全景および調査風景

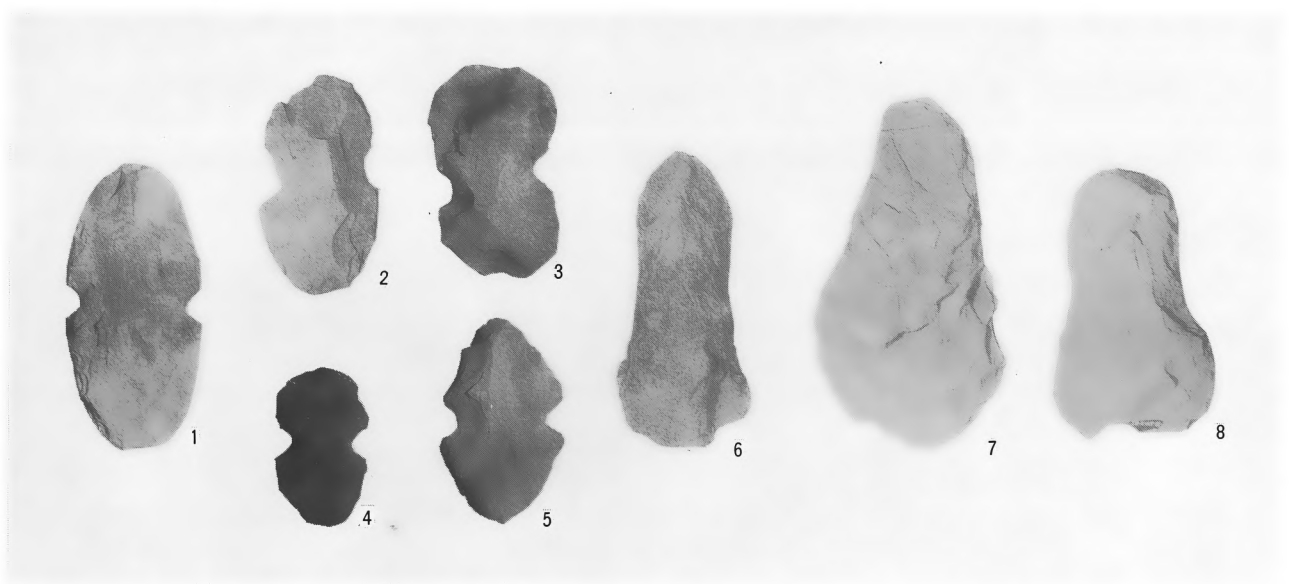
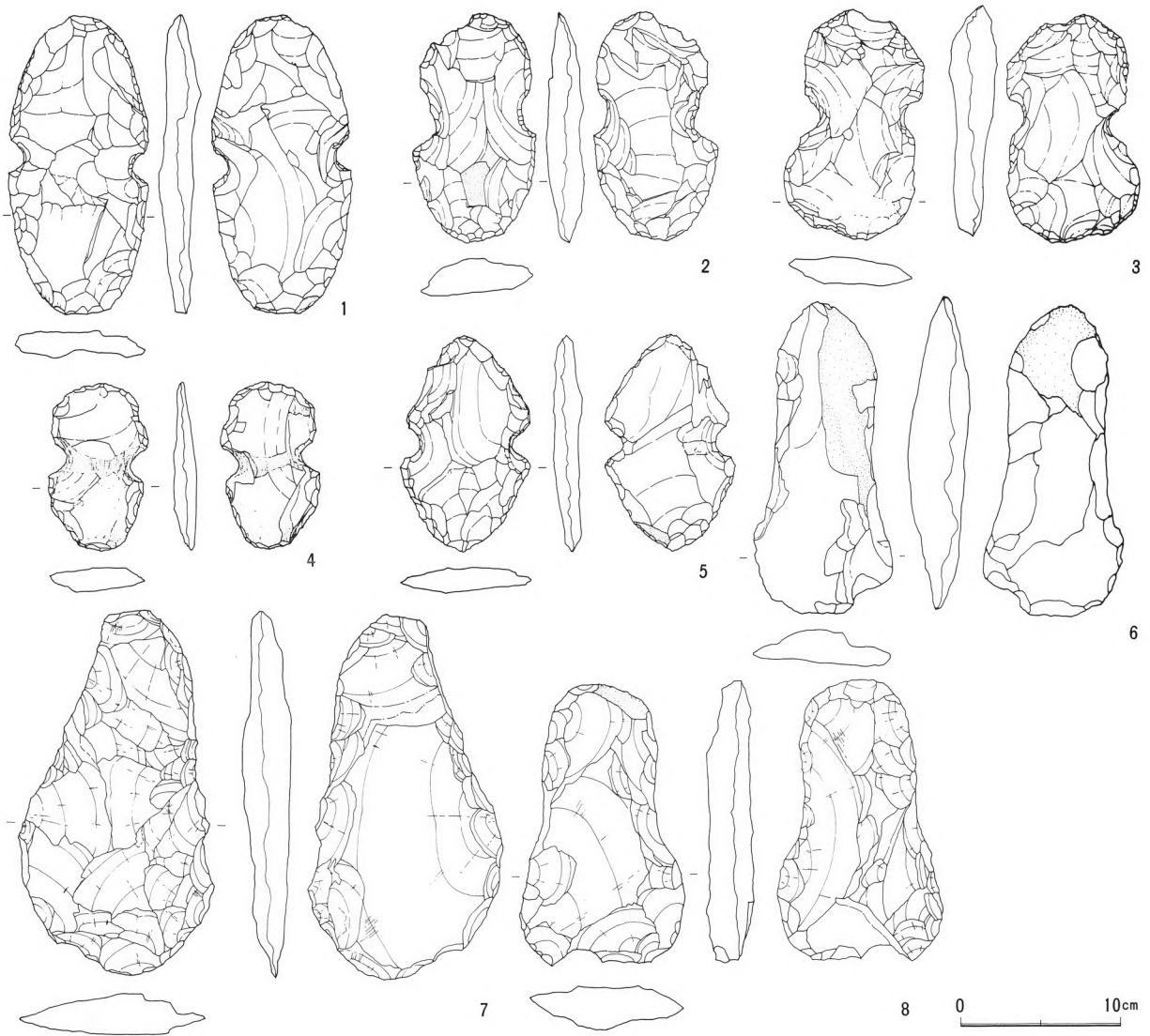
2. 出土遺物 ほとんどが小破片であり、器形が判るものは極めて少ない。1は小形の鉢で口縁部に2個1対の耳状の突起をもちその間に2条の沈線が走る。6単位の文様構成をとると思われる。色調は黒灰色を呈する。2は壺の口縁で粗い縄文が施されている。3は女方式に特徴的な小形の深鉢で沈線による菱形文で磨消し縄文を表出している。15は岩櫃山式に類似した大形壺の胴上半の破片で連続山形文で構成されている。ほかは壺あるいは甕の小破片で沈線による変形工字文・沈線と刺突列点を表出する、地文に縄文を有するものや、11・12の口縁が外反し研磨された無文

口縁のものなどがある。底部は網代底か木葉底となる。

石器は先端のやや尖った偏平な打製石斧が多く出土している(1~5)。大きさにバラエティーがあり、両端中央に挟り込みがあるのが特徴である。またこの挟り込みと、それを結んだ部分に磨耗痕が見られ、刃部には使用痕の見られるものもある。6~8はいわゆる撥形に近似した形態をとる、いたって大形の石斧である。ともに若干形態が異なり同類としての分類には無理があろう。それぞれ他遺跡で単発的な出土を見ているが不明な点も多く類例の増加を待つ必要がある。(下城 正)



土器実測・拓本図と同写真(縮尺不同・番号は実測図と同じ)



石器実測図。同写真（番号は実測と同じ）

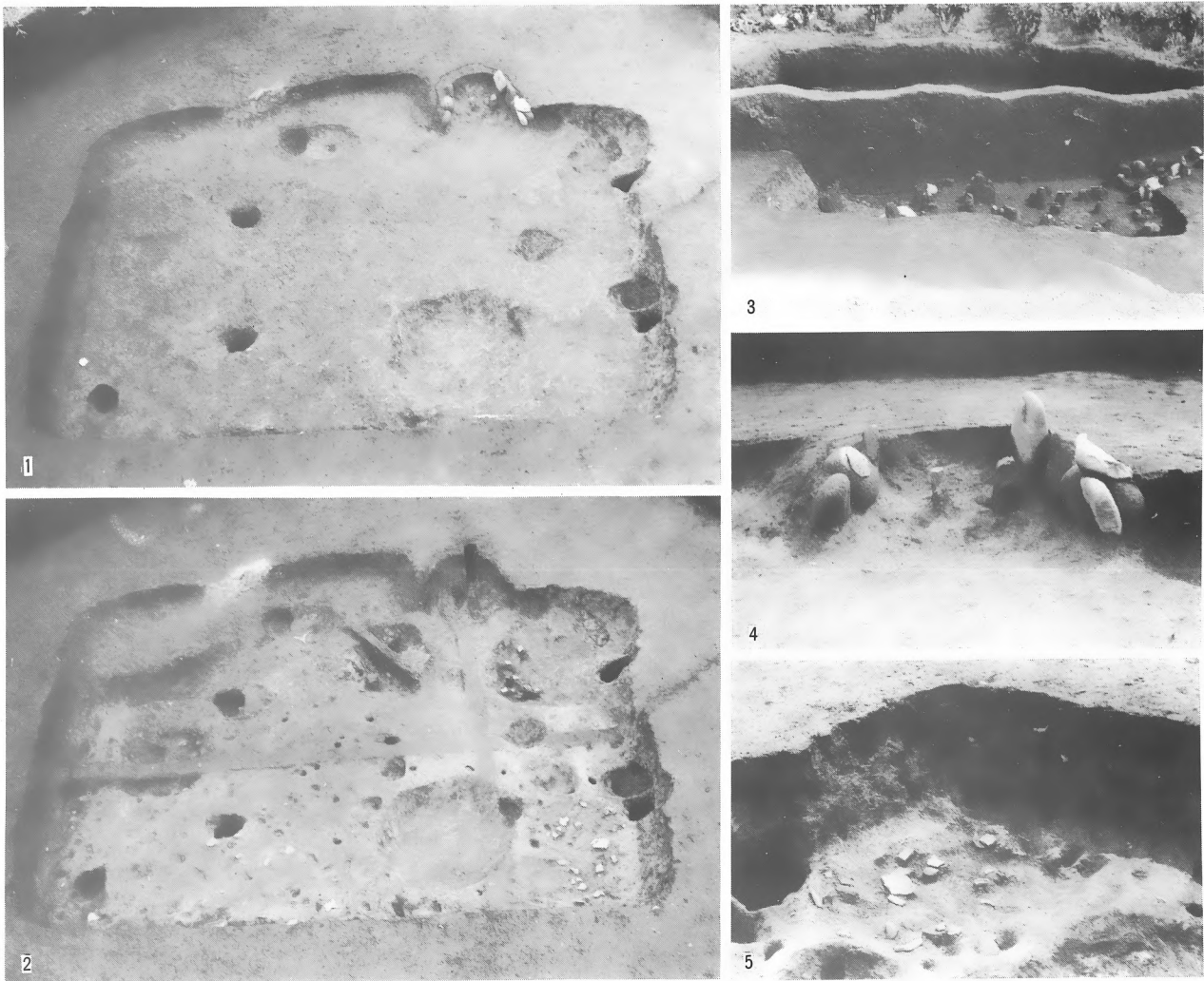
平安時代 の 遺構と遺物

上段で竪穴住居址一軒が確認された。遺跡地内全域に土師器・須恵器の散布が見られ、大きな集落が予想される。当地域における集落の調査が遅滞している現在、とくに西側山麓一帯に分布する窯址群との関連で注目される場所である。なお今回は住居址内における遺物の出土状態の把握を中心に調査が進められた。また出土土器は量的に多く、当地域独特の内容を具備しており重要な資料となり得るが比較資料などに乏しく、今回は資料の摘出のみにとどめる。

1. 竪穴住居址 本住居跡は上段発掘区の西南端よりに位置し、M-10グリッドを中心に確認された。住居の北側には東西に走向する小規模な埋没谷があり、ローム層の傾斜変換点に構築されているため、南半はローム層を掘り込み、北半は第Ⅲ層黒色土を掘り込んでいる。

住居址覆土は下部にいくにしたがってローム小ブロックをやや多く含むようになるが、ほぼ黒色土の単一層である。住居プランはほぼ隅丸の長方形を呈しているが、南・北・西壁はほぼ直線的であるのに対して、東壁は中央部付近よりカマド北側にかけて約50cmほど張出している。また北西・

南西コーナーは急な丸味を呈するが、北東コーナーと貯蔵穴状ピットのある南東コーナーは緩やかな丸味をもっている。壁高はプラン確認面から平均35cm前後で、ほぼ垂直に掘り込まれている。規模は南北軸約4.7m、東西軸約3.7mで南北に長軸をもつ。長軸の方位はほぼ真北に近くN-5°-Eを示す。床面はほぼ水平で全面に貼床が施こされている。東壁の張出した部分はやや軟弱であるが、他の部分は固くしまっている。南半はローム小ブロックを多く含んだ黒褐色土で1~2cmの薄い貼床をなし、北半はやや粘性の弱い黒色土で同様に薄い貼床になっている。柱穴は5本確



1. 住居の全景 2. 同、貼床下の状態 3. 覆土の断面 4. カマドの状態 5. 貼床下の遺物

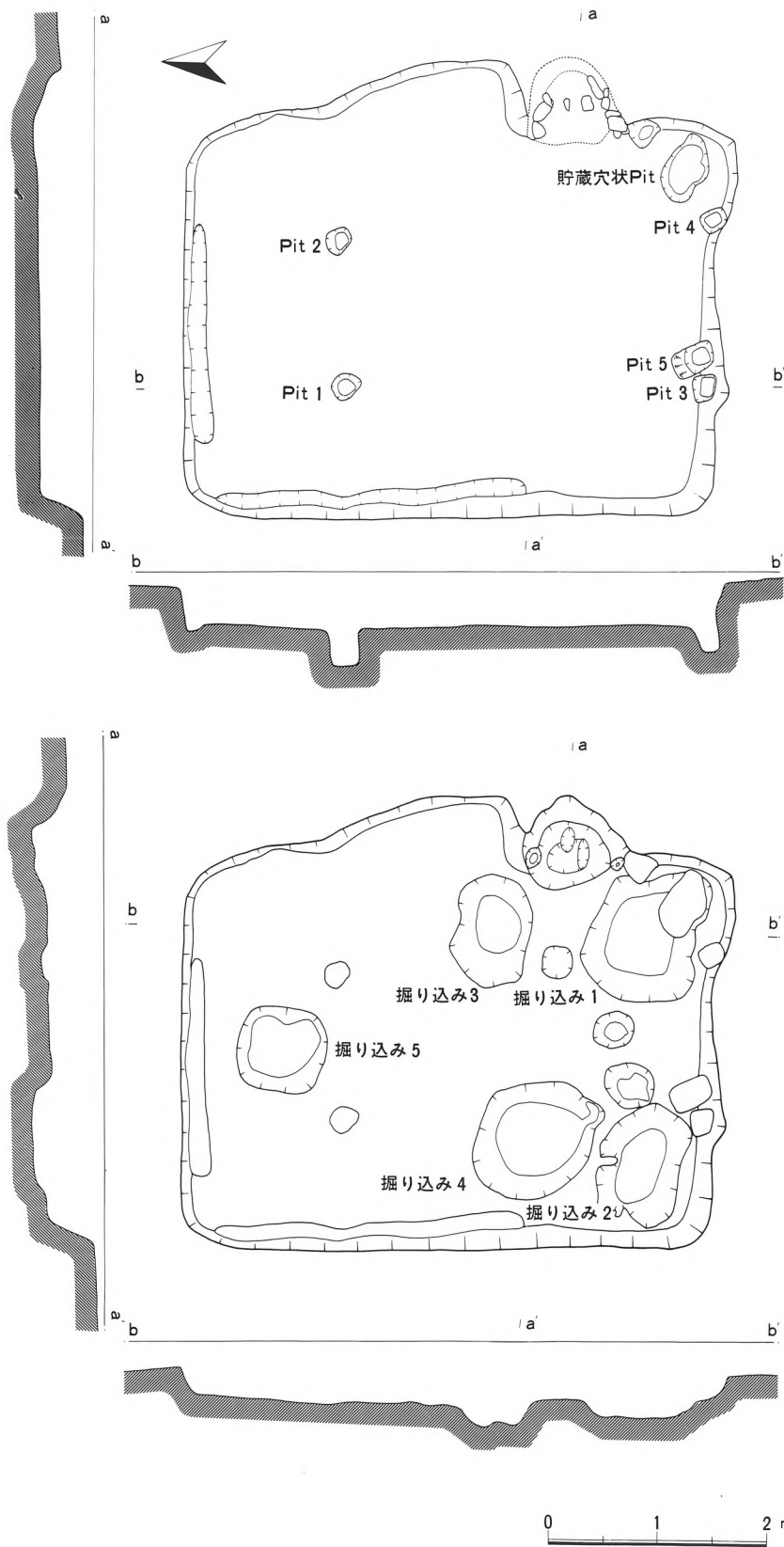
認められたが、支柱穴はピット1～4
と思われる。ピット1・2は北壁から
1.4m、東・西壁から1.1mの位置
にあり、柱穴間は1.35mである。ピ
ット3・4は南壁に接してあり、
ピット3は西壁から1m、ピット4
は東壁から0.83mの位置にあり、柱
間は1.53mである。ピット1と3の
間とピット2と4の間は同様の3.42
mである。なお4本の支柱穴は次の
特徴をもつ。ピット1・2は掘り方が
ほぼ円形で、ピット3・4は方形が
かっている。対角線上のピット1・
4と2・3はほぼ同様の深さである。
ピット1・2は垂直に掘り込まれて
いるが、ピット3・4は住居内部へ
やや傾斜して作られている。ピット
1・2の底面には白色粘土が薄く張
られていた。ピット5は南壁に近く、
ピット3の東側にある。ほぼ方形の
掘り方を呈して、深さは-20cmで他の
ピットよりも浅い。このピットから
出土した土器片が床面と覆土中の土
器片と接合する例があり、他のピッ
トとは性格を異にしているかもしれ
ない。周溝は北壁と西壁の一部に確
認され、浅いU字形を呈している。
北壁に沿った周溝は巾17cm、深さ-
5cmで、西壁に沿った周溝は巾14
cm、深さ-5cmでやや凹凸がある。

柱穴一覧表

No.	平面形	規 模		
		長軸	短軸	深さ
1	不整円形	2 8	2 3	-35
2	不整円形	2 4	2 1	-25
3	隅丸方形	2 4	2 1	-26
4	隅丸方形	2 4	1 9	-35
5	隅丸方形	2 7	2 4	-20

床面下の掘り込み一覧表

No.	平面形	断面形	規 模		
			長軸	短軸	深さ
1	不整楕円形	碗 状	110	94	-16
2	不整楕円形	皿 状	115	76	-12
3	不整楕円形	碗 状	103	71	-22
4	不整楕円形	碗 状	123	105	-16
5	不整隅丸方形	碗 状	77	73	-22



1.住居址実測図 2.床面下掘り込みの実測図

カマドは東壁中央部と南壁からの中間に位置し、焚口部の中は62cmで燃焼部は61cmである。北側壁は地山を利用し、東壁張出部から突き出た状態で造り出し状に作られている。燃焼部は皿状を呈し、煙道部は急角度で立ち上がるが、煙道は確認されなかった。燃焼部中央には15cmの間隔で、高さ12cmの角柱状の山石による支柱が2本直立していた。カマド両側壁は偏平な河原石と山石を2・3個使用し、直に立てて構築している。北側の焚口は河原石1石であるが、南側の焚口は河原石と山石を立てその上に河原石1石を載せて構築している。焚口の両袖石はカマド内へやや傾斜している。燃焼部には焼土が6cmほど堆積し、両側石・支柱も良く焼けており、カマド前面の床面には焼土ブロックと炭化物が薄く堆積していた。カマドの掘り方は不整楕円形で二段に落ち込む浅いスリ鉢状を呈している。掘り方には2本の支柱の掘り方と両焚口の袖石の掘り方が検出された。貯蔵穴状ピットは南東コーナーに位置し、平面形は不整楕

円形で断面形は碗底状を呈している。規模は長径64cm、短径40cmで深さは-14cmである。内部からは碗とハガマの小破片が数片出土した。

なお住居址床面は貼床で調整され、生活面の調査後に貼床を剥し掘り方の調査をおこなった。床面下は全体的に小規模な凹凸があり、特に南半はそれが著しい。床面下からは5ヶ所の掘り込みが検出された。色調は各々異なるが、いずれもローム小ブロックを多く含んだやや軟弱な土層で埋っている。1～4号掘り込みは相対的な位置にあり、平・断面形も類似している。覆土中からは碗とハガマの小破片が、1号掘り込みからは17片、2号掘り込みからは23片、3号掘り込みからは17片、4号掘り込みからは64片出土し、2・3・4掘り込みから出土した土器片は床面上から出土した土器片と接合するものがある。

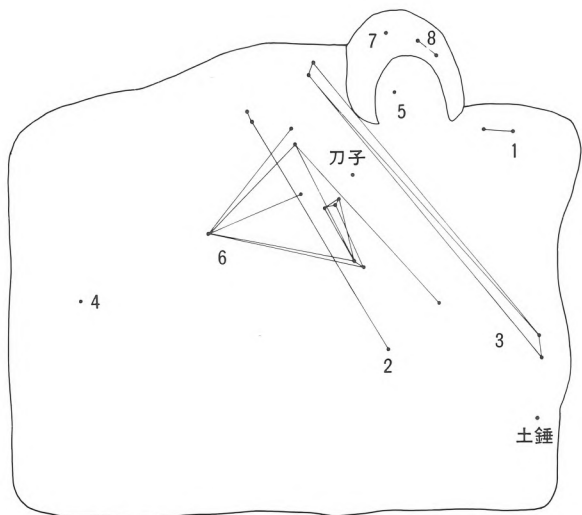
2. 遺物の出土状態 本住居址からは完形および一部破損の碗8個体、ハガマの完形4個体および半完形6個体、

須恵器瓶の大破片3個体および刀子・土錘が出土したが遺物のほとんどは床面近くの覆土下部より小破片で出土し、それらのほとんどが碗とハガマの破片であった。覆土上部の攪乱層中の一括取り上げ遺物は南半がやや多い状態であり、覆土下部でも同様であった。碗・ハガマのほとんどがこの部分より出土している。また、床面密着の遺物も南半が多く、特にカマド周辺が多い。碗の完形および半完形品は次のような出土状態を示す。碗は、1カマド内と床面から完形・半完形で逆位で出土したもの。2床面および覆土下部に小破片で四散して出土したもの。3覆土上部およびカマド上部に完形・半完形で逆位で出土したもの。ハガマは1完形・大形破片がカマド内に、小破片が床面に四散して出土したもの。2床面に潰れた状態で出土したもの。3床面に小破片で四散して出土したもの、とに分類される。また床面下の掘り込みとピット5内から出土した土器片と接合する例がある。須恵器瓶3個体は北西コーナーよりの覆土下部に小破片で四散して出土した。

碗1は貯蔵穴状ピット北東縁



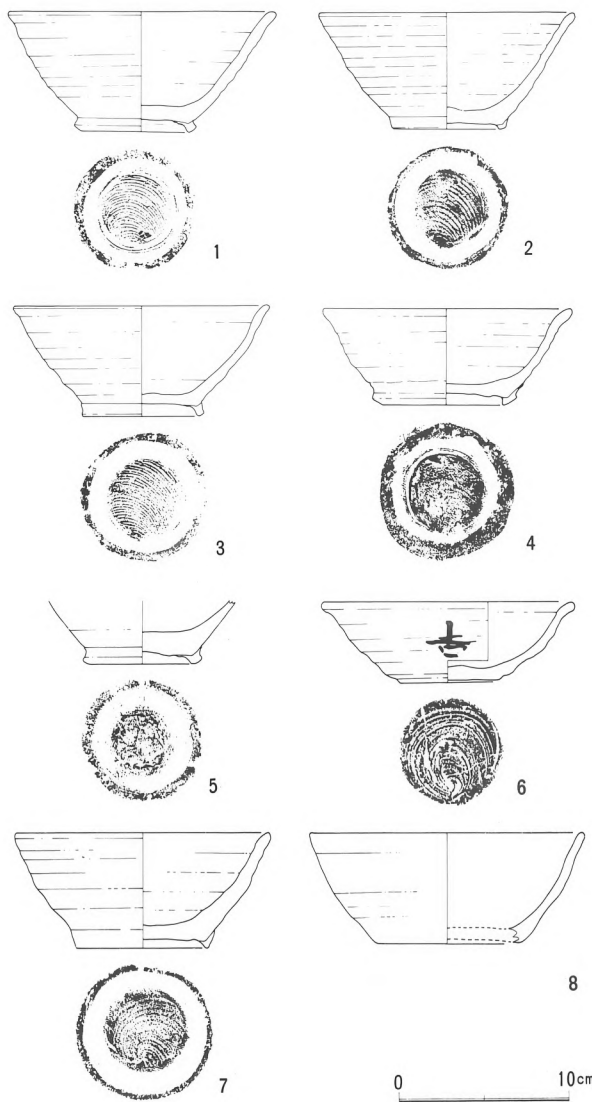
1. 遺物の出土状態 2. カマド付近の遺物 3. 最高位出土の碗



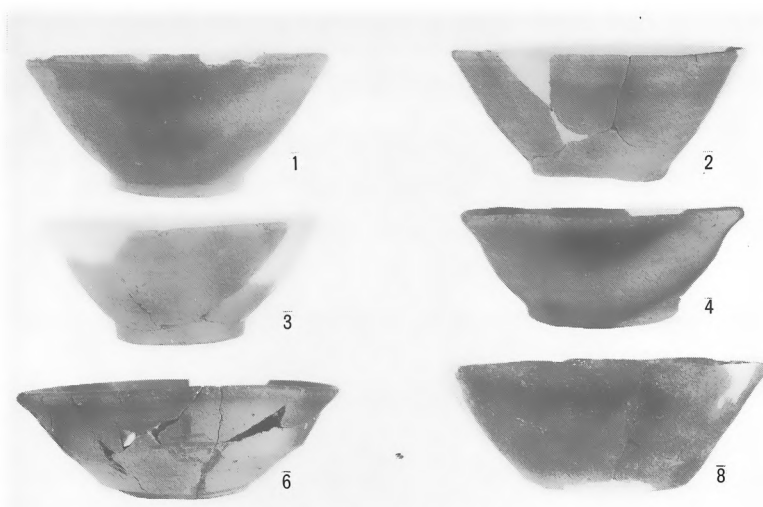
坑の接合関係図 (付. 土錘・刀子)

よりほぼ完形で逆位で出土した。坑2は東壁より中央部とやや南西によった床面近くに小破片で出土した。坑3はカマドの造り出し部北側床面近くと距離をおいたピット5の覆土上部に小破片で出土した。坑4は北壁より中央部の覆土上部から完形で逆位で出土した。坑5はカマド燃烧部から底部が出土した。坑6は器面に「吉」の墨書があり、その出土状態は他の例と若干異なっていた。中央部からやや東へよった覆土下部に小破片で四散して出土している。坑7はカマド煙道部の上部から大片が逆位で出土した。坑8はやや東よりのカマド煙道部の上部より小破片で出土し、刀子と土錘はともに床面よりの出土である。

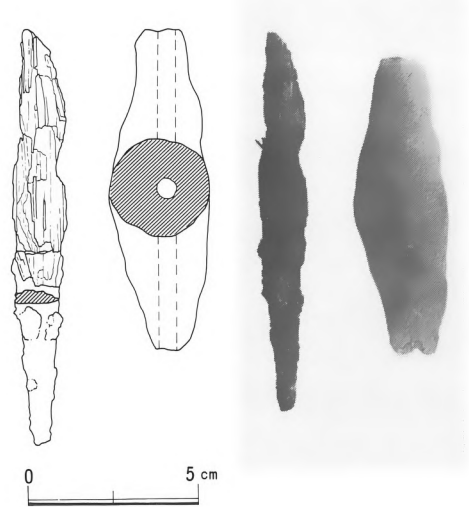
本住居址から出土した坑は次の点が指適される。右回転によるロクロ整形で器面にロクロ痕を残す。器形はほぼ直線的に開口し、口唇部がやや肥厚する。底部は回転糸切りで付け高台はやや外反する。胎土には砂粒を含み、焼き締めが完全で無く、燻しがかかっている。なお刀子は柄の木質部が残存していた。



坑 実 測 図

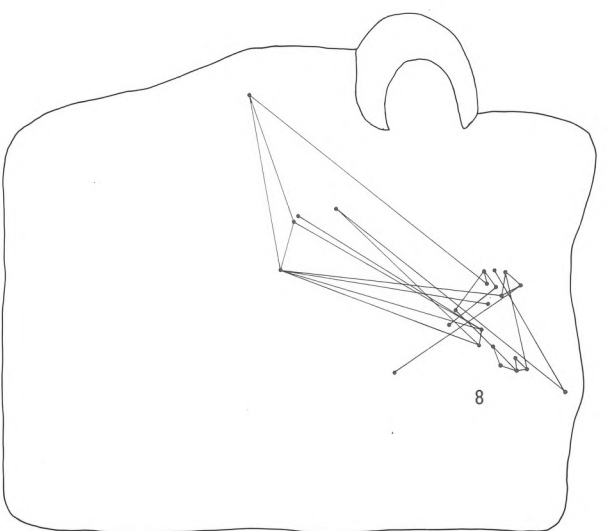
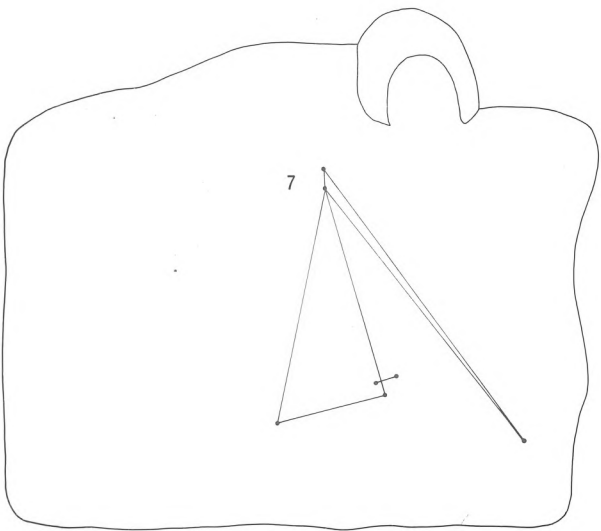
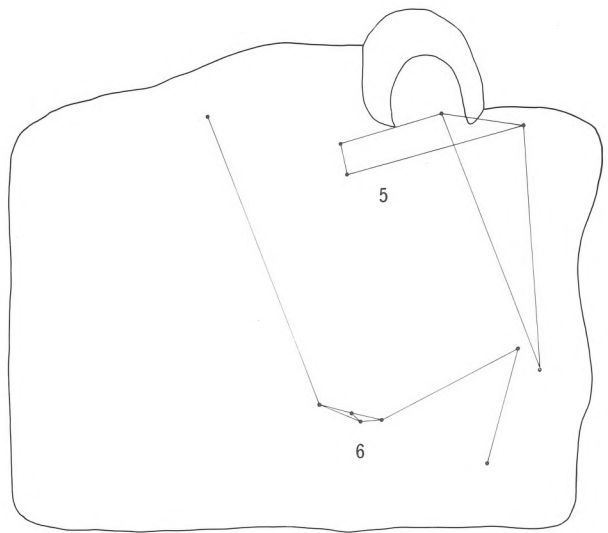
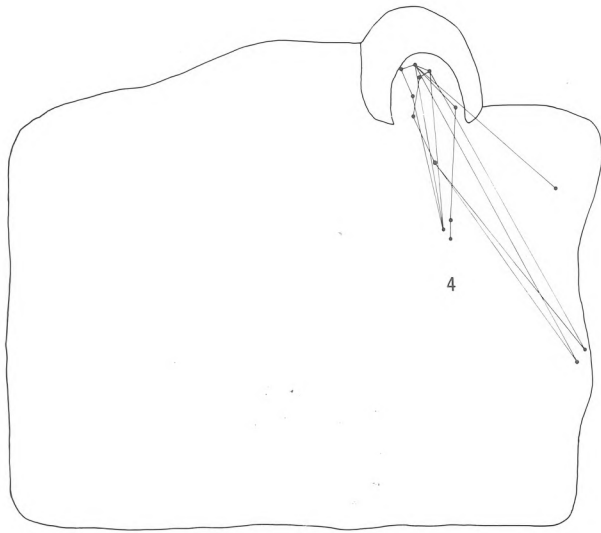
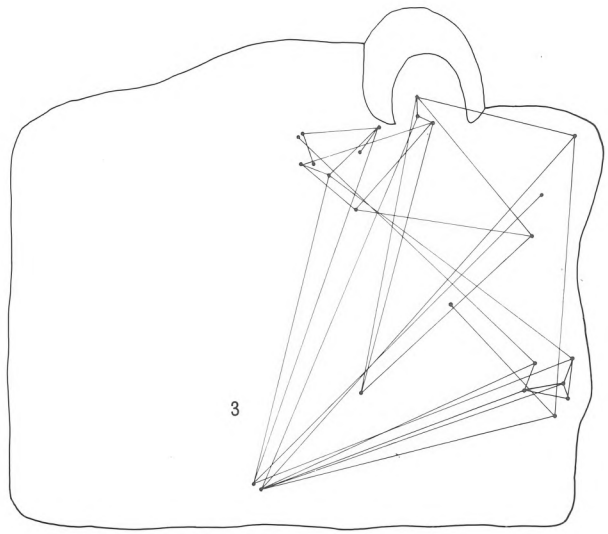
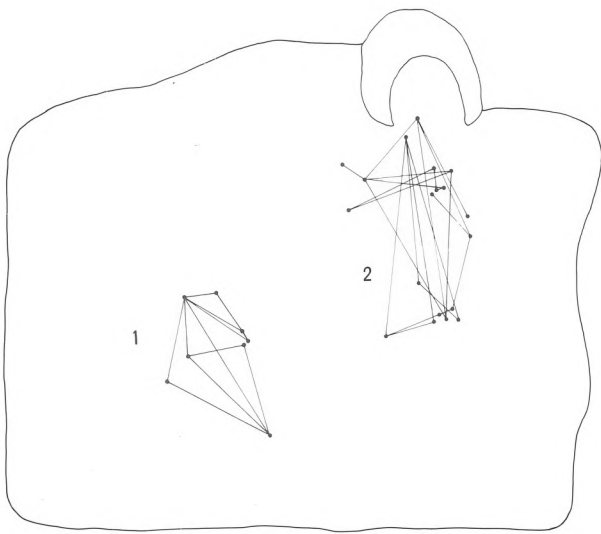


同, 写真 (番号は実測図と同じ)



刀子・土錘実測図

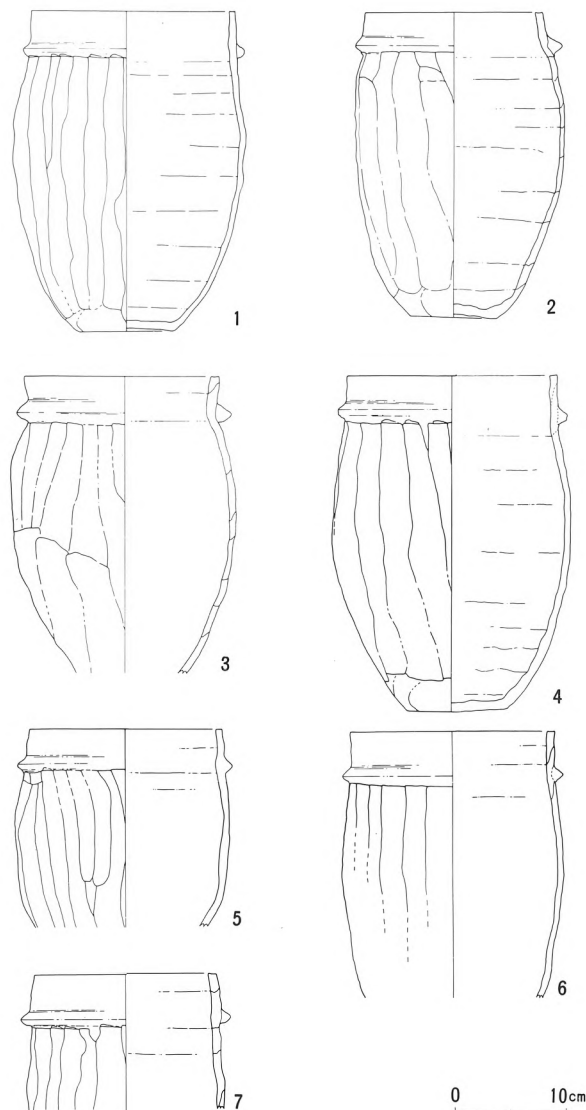
同, 写真



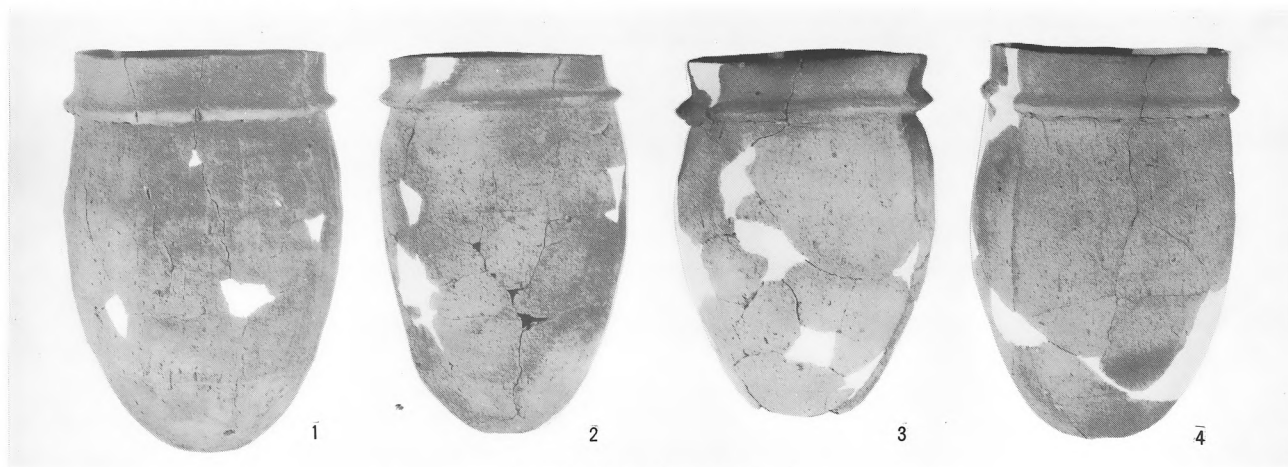
ハガマの接合関係図

ハガマ1は中央部からやや北へよった床面に押し潰された状態で一括で出土し、若干の小破片が西方から出土している。ハガマ2はカマド焚口に口辺部大破片が出土し、カマド前面の床面および床面近くからは小破片が出土している。ハガマ3はカマド内からやや大形の破片が出土し、小片が南半全面の床面および床面近くで出土した。またピット5の覆土上部と床面下の3号掘り込み覆土上部からも小破片が出土している。ハガマ4はカマド南焚口に口辺部が横に潰れた状態で一括出土し、ほかに小破片がカマド前面の床面から出土している。またピット5の底部近くから小破片が2片出土している。ハガマ5は口辺部大破片がカマド焚口とカマド両側の床面から出土し、胴部小破片が南壁よりの中央部床面近くから出土している。ハガマ6は床面下4号掘り込み内と、南西コーナーの覆土下部と東壁寄りの中央部床面近くから小破片で出土している。ハガマ7は中央部からやや東へ寄った床面と、床面下2・4号掘り込み内から小破片で出土している。ハガマ8は胴下半部のみで底部は南壁より中央部の床面近くから小破片とともに出土し、中央部から東へ寄った覆土下部にも小破片が出土している。またピット3内と床面下4号掘り込み内からも小破片が出土している。本住居址からはこのほかに23個の破片での接合資料があるが、南半の床面から覆土下部にかけて出土しており、カマドと関係するもの2個、床面下1～4号掘り込みと関係するもの8個、ピット5と関係するもの1個がある。

本住居址から出土したハガマは次の点が指摘される。ハガマの器形は最大径を胴部やや上半にもち、底部は平底で口辺部は直に立つ。鏝は粘土紐を張付け、断面は丸みをおびた裁頭の三角形を呈している。鏝から口唇部、器内上縁にかけて横ナデの調整をしている。胴部は底部のやや上から口辺部方向へ縦方向のヘラケズリをおこなっており、鏝下端で止め押えをしている。また胴部は粘土紐の痕を残し、やや凹凸している。器内は横ナデをおこなっている。胎土には小礫・砂粒を含む。焼成はよい。(下城 正)



ハガマ 実測図



同、写真(番号は実測図と同じ)

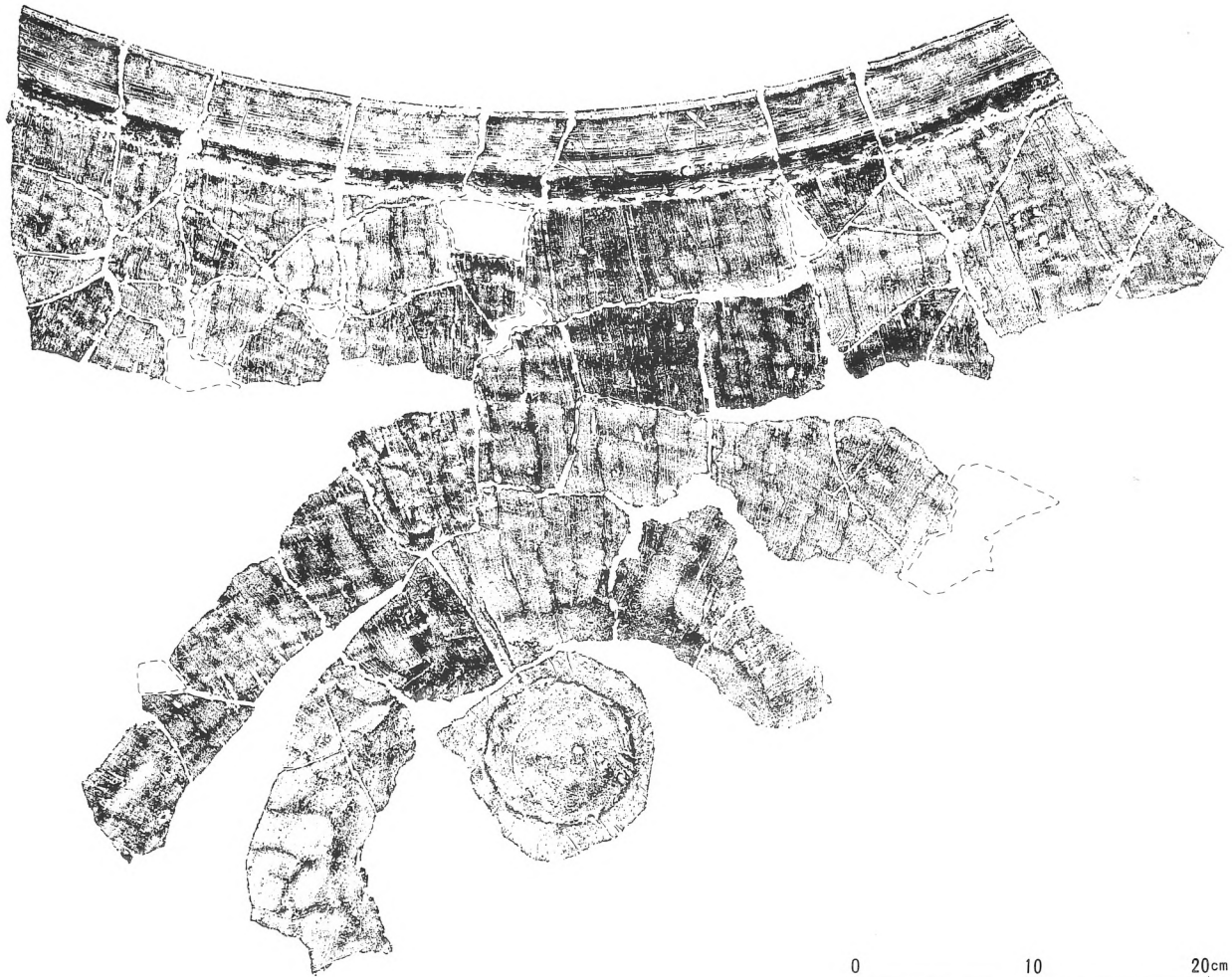
成 果 と 問 題 点

今回の調査は、遺跡保護を前提とした計画道路の迂回地域に対して遺跡周縁部の遺構確認調査を目的としていたため、遺跡全体を把握する資料を得ることはできなかった。しかし、確認された各遺構および出土遺物は群馬県の考古学を考える上で重要な位置付けをされるものばかりであった。

縄文時代中期の敷石住居址は現在まで県内で約60遺跡が調査または確認されており、その個数は100軒を上まわっている。分布は西北の山間部に集中しており、ほかに赤城

山南麓周辺、前橋高崎台地、藤岡台地などで類似のものを含めて数カ所ほど見られる。赤城村三原田遺跡では加曾利E期の竪穴住居址が約350軒調査され、そのうち約50軒が敷石住居型式として認定分類されている。梨の木平遺跡では1軒のみの調査であったが、地元の聞き込み調査では耕作中にも若干確認されているようである。

調査された敷石住居址は表土下約2mの地点で確認されており、埋没谷の急激な土砂堆積で部分的に敷石のずれた所もあるが大方は良好な出土状態であった。竪穴住居の形



ハガマ (No.1) の拓本による器面の調整と破片の形状の観察図

態をとり、配石主体部は6辺で構成されている。張り出し部は板石を中心に用い、一列に配置してある。その構築順序を追ってみると、まず竪穴の掘り方を完成させるとともに柱穴を決定し、各柱穴間を直線的に結んで内部に石敷きをおこなっている。柱穴の掘り方を微細に検討すると各柱穴ともに掘り方上に敷石が食い込んでおり、一部には根詰めと思われる石も存在していた。このことは柱を建ててから石敷きをおこなっていることを裏付けている。すなわち主体部に限って見れば、住居が構築された後で最終的に敷石が完成されたと推定でき得る。なお石敷の工程で炉の構築をいつにするかは確定的な証左を得ることはできなかった。また、埋甕敷設の状態も不明な点が多い。この付近の敷石が乱れており、出土時点では2石が埋甕上に及んでいたが、この2石が原位置であったか否かは速断を避けたい。また、敷石は板石と偏平自然石が計画的に配置しており、大形石の間を中形の石で補填し、さらに小石を用いて目詰めをしている。大形板石には稜を小刻みに打ち欠いて整形をおこなっているものもある。全体的にはほぼ左右対称になっているが、何を意味するかは皆目見当がつかない。いわゆる間取りとしての機能的側面は敷石部内では不明な点が多いが、柱穴間を結ぶ敷石部縁辺に立位の石列が存在しており、これを境として壁までの間を敷石部に対して外縁部として明確に把握することができる。なお遺物は敷石部奥部の大型深鉢のほかは大よそ外縁部周辺より出土している。

弥生時代中期の遺跡は県内各所でその分布が確認されている。しかし発掘調査による資料の希薄な点で、必ずしもその研究は進捗しているとは言えない。本遺跡では量的には比較的多くの資料を得たが、土器片は概して小片が多く型式を語るまでには至っていない。なお伴出した石器類は中期土器片が同一層位中ではしかも集中して出土しており、これらの土器とほぼ同一時期として考えてさしつかえないだろう。従来、両端がやや尖った大型偏平の打製石斧は弥生時代の所産として考えられていたが、本遺跡ではバラエティーをもつ石器群の主翼を担う形で出土している。小型のものも出土している。弥生時代における石器群の良好な資料と言えるが、土器の再吟味とともに今後の課題とした。なお土壌群に関しては層位的な裏付けのみで同時期の所産と推定したものである。

平安時代の住居址が当地域で完全に調査されたのは今回が初めてであった。今回の目的は資料の確実な抽出に中心がおかれ、住居内一括出土資料の把握に注意が注がれた。遺物取上げ総数は土器片で286点（完形および若干の一括取り上げがある）で当該期の住居址としては比較的输出量が多かった。さらに、そのうちの132点が完形または半完形として接合され、その率も高かった。大半の土器が床面または直上で出土しているが、貼床下の調査で83片が出土している。これら両者の接合も見られ、また貼床下に見られる掘り込みとの関係にも問題の残るところである。

（能登 健）



梨の木平遺跡 ©

発行 昭和52年3月31日

印刷 本郷プリント

発行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町一丁目1の1